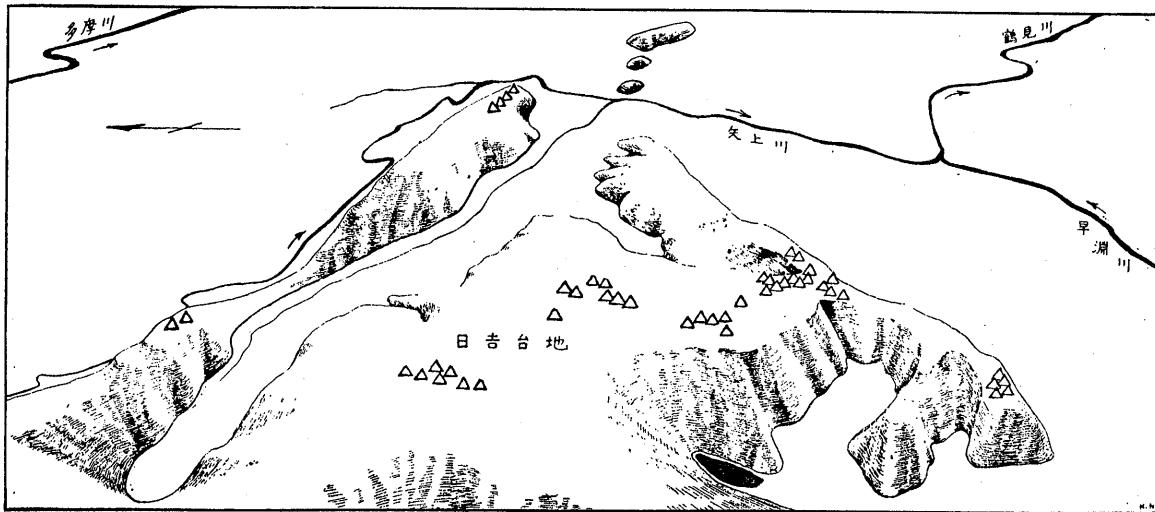


Title	日吉臺彌生式豎穴發掘報告
Sub Title	
Author	西岡, 秀雄(Nishioka, Hideo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1940
Jtitle	史学 Vol.18, No.4 (1940. 4) ,p.81(643)- 141b(703b)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	挿繪:日吉臺彌生式住居址及出土土器その他
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19400400-0081

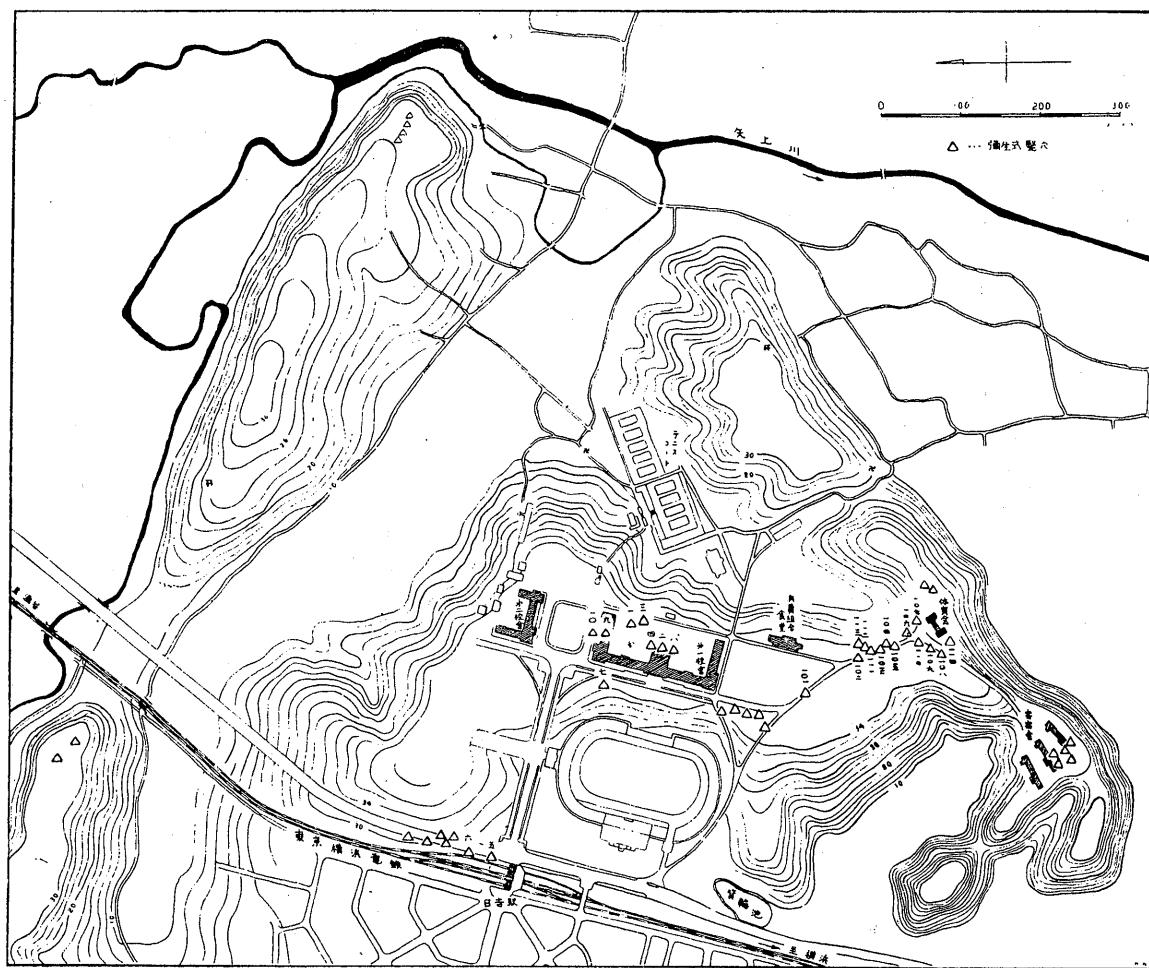
慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

附圖第一 日吉臺鳥瞰圖 (△印は彌生式堅穴住居跡)



附圖第二 日吉臺彌生式堅穴分布圖



日吉臺彌生式竪穴發掘報告

西岡秀雄

序言

昭和十一年七月、三田史學會に依つて行はれた日吉臺の慶應義塾大學豫科構内の彌生式竪穴群の發掘に關しては、既に筆者が昭和十一年十月「史學」第十五卷第三號誌上彙報に「日吉臺竪穴住居址發掘報告（概報）」と題して、或は又、昭和十四年四月慶應義塾大學醫學部北里紀念醫學圖書館にて開催の東京人類學會・日本民族學會第四回聯合大會の席上に於て「神奈川縣日吉の發掘に就いて」と題して、其の發掘概要を發表し來つた所であるが、種々の事情に因つて詳細なる發掘報告は執筆發表するの餘裕を得なかつたのである。然るに今回筆者は現役航空兵として渡満せねばならぬ事となり、茲に發掘當事者として斯學の上からも急遽本報告執筆の必要を感じ、多忙の中に本報告を執筆するに至つた次第である。

本報告は當初昭和十一年七月の發掘に關してのみ詳細敍述する積りであつたが、それ以前に三田史學

會又は土木工事に依つて發掘された堅穴や土器類に就いても一括整理し、考古學上總括的に觀察して置くの有意義なるを感じ、從つて昭和十一年七月の發掘にのみ限定せず、それ以前及び以後日吉臺に於て發掘された彌生式堅穴及び土器石器等も合せて其等全貌を明かにする事とした。勿論、右の如く本報告は多忙の中に取急ぎ纏め上げた結果、今後更に識者の御叱正を請はねばならないが、斯學上に聊かなりとも資する所あらば幸甚である。

尙、本稿執筆に當り恩師、先輩、學友の御指導御鞭撻及び御好意に對して、深厚の謝意を表する次第である。

第一章 堅穴所在地

慶應義塾大學豫科の敷地となり、多數の彌生式堅穴や土器類を發見出土するに至つた「日吉臺」の地は、現在横濱市港北區日吉町に屬し、多摩川及び矢上川・鶴見川の下流域を俯瞰する見晴しも亦日當りも良い臺地であり、遠き石器時代の昔より人類の居住するに好適の地であつたと思はれる。

本臺地は、東京灣に注ぐ多摩川下流の右岸臺地の一端であり、地質學上の所謂「武藏野臺地」に相對する「多摩川臺地」の殆ど末端に位置して居る。即ち日吉臺は帝國陸地測量部發行の地形圖では次の諸圖に包含される。

1 「東京」二十萬分一

2 「東京西南部」五萬分一

3 「川崎」二萬五千分一

行政的に云ふと、この地は古く東山道牟邪志（武藏）に屬し、其後奈良朝時代光仁天皇の寶龜二年十月二十七日、武藏國は東海道に編入され、日吉臺は武藏國橘樹郡下に在り、明治初年に至つて多摩川右岸の橘樹郡は神奈川縣下に編入を見、從つて日吉臺は神奈川縣橘樹郡日吉村の中に含まれ、近年横濱市の擴張によつて日吉村一帶の地は横濱市に屬し、横濱市神奈川區日吉町となり、更に最近には横濱市港北區日吉町と區名が改正された。日吉臺と云ふのは通稱であり、日吉村と云ふのも明治以來の名稱で本塾豫科の敷地は維新前には矢上村及び箕輪村と呼ばれし地點であり、現在も小字矢上及び箕輪に該當する。

右の如く日吉臺の行政的名稱は可成り色々と變遷をなして來たが、要するに現在の日吉臺約十三萬坪の地は、昭和五年二月に本塾豫科の敷地となり、而して建設土木工事の進展に伴つて彌生式遺跡や土器類が發見されるに至つたのである。唯、誠に遺憾なことは、校舎建設の敷地に當つた爲めに、現在その遺跡の多くは消滅して原位置を詳にしない事である。けれども今迄に日吉臺及び其附近に發見された彌生式堅穴の分布状態は、記録や發見當時に目撃した人々の記憶及び現存の遺跡を綜合して見ると附圖

第一・第二の如くである。そして實際は土木工事中、更に多くの堅穴遺跡が現はれた事と思はれるし、又、未發見の堅穴も日吉臺上には尙相當に存在する事と豫想されるのである。

即ち東横電鐵線日吉驛の東側には、現在日吉臺の西側一部を開鑿して線路に平行せる國道があるが、この國道及び附近の開鑿工事中、多くの堅穴が露出し彌生式土器など屢々發見された。然しながら不幸にして正確なる記録がない爲め、其の全てを圖上に記載出來ない。唯、先頃まで日吉驛構内東側の開鑿面に、二基の堅穴断面が僅に見られて居たが、最近は雜草繁茂してこれすら容易に見出し難い。又、第一校舎附近にも昭和七年地均工事に多くの堅穴が露出したが、今は全く其の影も形も留めない。唯、堅穴が毎日切崩されて行く地均工事の進行最中、八基の堅穴が三田史學會の手に依つて發掘調査された事は、不幸中の幸ひと云はねばなるまい。次ぎに第一校舎より體育會へ通ずる道路の開鑿に際しても多數の堅穴が現はれ、現在も其の一部は断面を見せ、特に其の中、第一〇二號・第一〇三號・第一〇四號・第一〇五號及び第一一一號の堅穴は、昭和十一年三田史學會に依つて發掘調査の後、現在その舊態を鐵筋コンクリート着色仕上げにより保存されて居る。彌生式堅穴の如き遺跡に對して此種永久的保存法の構せられた事は、斯學上誠に喜ばしい我が國最初の試みであり、而も其の中第一一一號堅穴が、完全なる原形を示せるものとして我が國で最大の規模を有する點は、特に注目に價ひするものと云へやう。帝國陸地測量部發行二萬五千分一「川崎」地形圖を基礎として、本堅穴の所在位置を測量計算すれば、次

の如くである。

東 經 一三九度三九分一八秒

北 緯 三五度三二分四三秒

海 拔 三六米

日吉臺地は體育會附近より南北に分枝し、其の南の寄宿舍方面の臺地及び北へ伸びた臺地からも、地均工事中に多くの土器片を出土し、堅穴も相當に存在したのであるが、當時誠に遺憾ながら其等の正確な記録調査を専門家に依つて行ふ機會がなかつた。寄宿舍附近で室谷次三郎氏の目撃された所に依ると、堅穴は五・六基に及んだと云はれるが、實際は更に多くの堅穴が存在した事と推察される。

以上で日吉臺の堅穴所在地に關して略述し終つた事とするが、尙ほ日吉臺上には例へば第一校舍南側附近の如く、今後發掘すれば更に堅穴が發見され土器類の出土が豫想される場所を有し、要するに日吉臺上殆ど全面に亘つて彌生式堅穴が存在し、當地が嘗つて彌生式先史人の大聚落であつた事が窺はれるのである。

〔附記〕 日吉臺上には現在も各所に土器片を散見するが、是等土器片の地表採集者に注意して置かねばならない事がある。それは土器片の散布地に二種類あり、即ち其の一は地均工事等によつて所謂「遺物包含層」が露出し、現地表に其の土器片類が散布して居るもの、換言すれば土器が原位置を餘り移動して居らないものと、其の二是、遺物包含層が開鑿され、その土器片類を含んだ土壤が日吉臺の他の場所に運搬埋め立てられ、其處に土器片を散見するもので、換言すれば、土器類の原位置が可成り移動し來つたものである。

のである。これを更に具體的に云へば、例へば第二校舎の西側附近及び體育會より寄宿舎へ通ずる臺地の一部の如きは、體育會の北側臺地の一部を開鑿した土壤を、トロッコにより運搬し來つて埋立てた場所である。従つて現在其の附近に地表採集出来る土器片があつても、其等は原位置を可成り移動した即ち元來は體育會北方臺地に出土したものがある事を注意せねばならない。

第二章 墓穴及び出土遺物關係日誌

本章に於ては今後種々の便宜に資する爲め、日吉臺に發見された彌生式墓穴及び出土遺物に關する日誌を、「史學」「三田評論」其の他の諸文獻記錄に依つて編錄して置く。

次表の如く、昭和五年の發端より昭和十一年六月までを第一期とし、その間昭和七年五月一日より同年同月三十日に掛けて行はれし七回に亘る發掘野外作業を特に第一期發掘となし、次ぎに昭和十一年七月より現在に至るまでを第二期とし、其の間昭和十一年七月三日より同年同月十七日に掛けて行はれた十二回に亘る發掘野外作業を特に第二期發掘と呼稱する。

第一期 (昭和五年春[發端]) 第一期發掘

昭和七年五月一日
昭和七年五月卅日
昭和十一年六月

第二期 (昭和十一年七月三日) 第二期發掘

昭和十一年七月三日
昭和十一年七月十七日
現在

第一期 I 發端より第一期發掘まで

昭和五年春

橋本(増)教授、古墳か何か在るかも知れぬとて二度ほど調査に日吉臺へ赴かる。(三田評論第四七九號一五頁)

昭・五・六・三

柴田講師・橋本教授日吉臺を調査し、第一號古墳を發見し、この際に彌生式土器破片の散布を注意さる。

(史學第一二卷第一號一二三一一四頁)

昭・六・一〇・一八

桑山龍進氏、日吉臺西北部で彌生式彩色土器片を採集さる。

(史前學雜誌第九卷第六號五五頁)

昭・六・末

橋本教授、日吉臺の地均工事開始に付、墾富局に對し遺跡遺物の出土するやも測り知れない事を注意さる。

(史學第一二卷第一號一二四頁)

昭・七・四・末

地均工事中の土工、彌生式土器の稍完全に近きもの一個を發掘する。

(史學第一二卷第一號一二四頁)

昭・七・四・三〇

三田史學會員、右土器の出土地點を確め、附近に堅穴の斷面あるを注意、大山史前學研究所員も亦視察さる。

(史學第一二卷第一號一二四頁)

昭・七・五・一

三田史學會員、第五號古墳發掘のため日吉臺に赴きし際、右堅穴附近を視察し發掘調査を行ふに決する。

(史學第一一卷第二號一六五一六六頁)(史學第一二卷第一號一二四頁)

II 第一期發掘(本發掘日誌ノ詳細ハ史學第一一卷第二號・同第一二卷第一號參照)

昭・七・五・二

第一號堅穴の發掘を開始する。砂層に至りて中止。

(史學第一一卷第二號一六五一六六頁)(史學第一二卷第一號一二四一一七四頁)

昭・七・五・六

第一號及び第二號堅穴を發掘する。

(史學第一一卷第二號一六六一六七頁)(史學第一二卷第一號一二五一一三一頁)

昭・七・五・八—昭・七・五・一

本塾創立七十五年祭を機とし、三田本塾にて「過去及び將來の日吉臺」展覽會を開催、日吉臺の堅穴平面圖其の他出土品など陳列する。(三田評論第四一八號口繪及ビ四〇頁)(史學第一一卷第二號一七二一一七四頁)

昭・七・五・一六 第三號堅穴を發掘する。

(史學第一一卷第二號一六七頁) (史學第一二卷第一號一二五一三三頁)

昭・七・五・二二 第四號・第五號・第六號・第七號・第八號・第九號・第十號堅穴を發掘調査する。

(史學第一一卷第二號一六八一一六九頁) (史學第一二卷第一號一二五一三七頁)

昭・七・五・二九 第二號堅穴の南側及び北側を發掘し、第二號・第四號堅穴間及び第二號・第八號堅穴間に連絡道路様の溝を發見する。

(史學第一一卷第二號一六九頁) (史學第一二卷第一號一二五一三三頁)

昭・七・五・三〇 第八號堅穴を發掘する。

(史學第一一卷第二號一七〇頁) (史學第一二卷第一號一二五一三七頁)

III 第一期發掘後

昭・七・六・一三 土木工事中、土器脚部二個出土す。

昭・七・七・一 史學第一一卷第二號誌上彙報に森貞成氏執筆の「日吉臺古墳及び先史時代住居址發掘記」が掲載さる。

昭・八・二・一 史學第一一卷第四號口繪に日吉臺堅穴出土土器石器の寫眞が掲載さる。

昭・八・四・一五 史學第一一卷第一號誌上に橋本增吉氏執筆の「日吉臺住居址發掘報告」の掲載を見る。

昭・九・一一 土木工事中、假寄宿舍敷地に彌生式土器脚部二個出土す。

昭・一〇・一二 土木工事中、假寄宿舍敷地に彌生式土器(口頭部缺損)發見さる。

昭・一〇・七 土木工事中、體育會附近に石器一個出土す。

昭・一〇・八 土木工事中、體育會附近に彌生式土器出土す。

昭・一一・三・三 土木工事中、寄宿舍敷地に彌生式土器脚部一個出土す。

昭・一一・六・二〇——昭・一一・六・二一

日吉豫科第二校舍落成披露會の開催に際し、日吉第二校舍に於て日吉臺出土土器石器などを陳列し展覽に供する。

(三田評論第四六七號三九一四一頁)

昭・一一・七・一 三田評論第四六七號誌上山口清一氏「大學豫科第二校舍を見て」に右展覽會の模様が述べられる。

第二期 IV 第二期發掘

昭・一一・七・三 第一〇一號・第一〇二號・第一〇三號堅穴の發掘を開始。

昭・一一・七・四 第一〇一號・第一〇三號・第一〇四號堅穴發掘。

昭・一一・七・五 第一〇四號・第一〇五號堅穴發掘。

昭・一一・七・七 第一〇四號堅穴發掘續行。

昭・一一・七・八 第一〇五號・第一〇六號堅穴發掘。

昭・一一・七・九 第一二號堅穴の推定發掘開始。第一トレンチ掘鑿。

昭・一一・七・一〇 第一二號堅穴發掘續行。

昭・一一・七・一 一二二號堅穴發掘續行。第二・第三・第四トレンチ掘鑿。

昭・一一・七・一三 第一二號堅穴發掘續行。第五トレンチ掘鑿。

昭・一一・七・一四 第一二號堅穴發掘續行。堅穴周壁部露出。

昭・一一・七・一五 第一二號堅穴發掘續行。

昭・一一・七・一七 第一二號堅穴發掘終了。

V 第二期發掘後

昭・一一・七・二七 神奈川縣史蹟調查委員石野瑛氏、日吉堅穴群を視察。

昭・一一・七・二九 森貞成氏、第一二一號堅穴を實測。

昭・一一・七・三〇 後藤守一氏、森氏と共に日吉臺堅穴群を視察。

(本發掘日誌ノ詳細ハ第三章參照)

(三田評論第四七五號二〇頁)

(史學第一五卷第三號口繪)

(東京日日「八月一日」・大阪毎日「八月二日」・歴史公論第五卷第九號「發見と發掘」欄)

昭・一一・七・三一 翁一太氏、三田史學會の依嘱により第一一一號堅穴石膏模型の製作に着手。

(東京日日「八月一日」・大阪毎日「八月二日」・歴史公論第五卷第九號「發見と發掘」欄)

昭・一一・八・六 第三回日米學生會議代表約百五十名、日吉臺堅穴群を見學。筆者その説明に當る。

昭・一一・八・七 慶應英語會の依頼により、筆者執筆「ON THE PR-DWELLING SITES AT HIYOSHI」と題する簡単な英文プリントを日米學生會議代表に配布する。

昭・一一・八・九 本塾醫學部生理學教室主催の夏季生理衛生實驗講習會の會員一同、松本(信)教授の説明により堅穴群及び出土品等を見學。

昭・一一・八・一 本塾醫學部豫科動物學教室に開催の動植物學實驗講習會の會員一同、日吉堅穴群を參觀。

昭・一一・八・一三 翁一太氏製作中なりし第一一一號堅穴模型完成し、本塾に引渡さる。

昭・一一・八・一九 文部省保存課より上田三平・岡正夫兩氏來訪、日吉出土品を參觀、堅穴群を視察さる。

(三田評論第四六八號五八頁)

昭・一一・八・二一 ハアバード大學創立三百年祝典に際し小泉塾長の手を經、本塾よりハアバード大學へ寄贈することとなつた、日吉臺出土土器石器・第一一一號堅穴模型・日吉出土品寫眞帖(PREHISTORIC FINDS AT HIYOSHI)等、龍田丸に積込まれ横濱出港。

(三田評論第四六八號五九頁)

昭・一一・八・三一 三田評論第四六八號上グラビヤ特輯口繪に、ハアバード大學への寄贈品及び第一一一號堅穴發掘現場の寫眞など掲載さる。

昭・一一・九・一 考古學雜誌第二六卷第九號誌上彙報に森貞成氏「三田史學會の近況」と題し、第一期發掘特に第一二一號堅穴の發見及びハアバアド大學への寄贈品等に就いて簡単なる紹介を試みられる。又、歴史公論第五卷第九號誌上「發見と發掘」欄に「川崎の市外に彌生式堅穴」と題して、去る八月二日の大阪毎日所載の記事轉載さる。

昭・一一・九・二 アサヒグラフ第二七卷第一〇號誌上に「日本一の先住民の住居跡發見」と題し寫眞掲載さる。

昭・一一・九・三 小泉塾長、ハアバアド大學總長コナント氏に寄贈品贈呈の事を述べらる。（三田評論第四七一號六一七頁）

昭・一一・九・一六 ハアバアド大學創立三百年祝典に際し、日吉臺出土品・堅穴模型其の他寄贈さる。これに對しハアバアド大學フォッグ美術館ラングドン・ウォーナー氏より小泉塾長宛禮狀發送さる。（三田評論第四七一號八一九頁）

昭・一一・九・一八 ケンブリッジにて山本敏夫氏は小澤愛蔵氏に宛、日吉出土土器類の寄贈が悦ばれし旨を報告さる。

（三田評論第四七一號七頁）

昭・一一・九・二〇 小泉塾長、「……此手紙は贈品準備に心せられたる役員教授諸君に御示被下度候」云々とある書簡を門野・名取・加藤・楨・倉井五氏連名宛に出さる。

（三田評論第四七一號六一七頁）

昭・一一・一〇・八 第一一號堅穴の茶の木の根によつて作られた、堅穴を南北に貫く溝に關して文部省保存課上田三平氏疑問を抱かれし爲め、上田氏と橋本・間崎・松本（信）三教授、保坂氏及び筆者發掘現場に立會の上、中央溝を再調査し、茶の木の根による事を明白にする。

昭・一一・一〇・一〇 史學第一五卷第三號誌上彙報に筆者執筆の「日吉臺堅穴住居址發掘報告（概報）」、及び同誌口繪に第一一二號堅穴寫眞並びに森貞成氏による同堅穴實測圖など掲載さる。

昭・一一・一〇・一一 第一一號堅穴保存工事に付き、排水土管埋設のため本堅穴より東方へ向けて掘鑿せし溝に、第一一二號・第一二三號堅穴の斷面現れ、彌生式土器底部等を出土す。

昭・一一・一〇・一〇 第一〇二號・第一〇三號・第一〇四號・第一〇五號・第一一二號堅穴の鐵筋コンクリート着色仕上げによる

保存工事成る。

(三田評論第四七一號四九頁)

昭・一一・一〇・一五

東大人類學教室八幡一郎氏外十四名特に日吉堅穴群を參觀。

(三田評論第四七二號五二頁)

昭・一一・一・一五

三田評論第四七一號誌上に、ハーバード大學への寄贈品に關する、小泉塾長・山本敏夫氏・ウォーナー氏の米國よりの書簡など掲載さる。

昭・一一・一・一

歴史公論第六卷第一號誌上所載の蘆田伊人氏「日本古代の村落」に、蘆田氏が曩きに歴史地理第五十五卷第一號へ「南部武藏に於ける最初の居住地帶」と題し、日吉村一帶の地を擬定したが、現にこの推案適中して

日吉村の慶大敷地に多くの居住跡を發見してゐる旨を述べられて居る。

三田評論第四七九號誌上の柴田常惠氏「日吉加瀬山古墳の發掘に就て」に於て、日吉彌生式堅穴遺跡に關しても言及される。又、同誌所載「座談會考古學を語る夕」にも、日吉堅穴の發見初期に就き橋本・柴田・小澤諸氏の問答速記録が掲載さる。

昭・一一・一・一〇—昭・一一・一・一三

三田史學會主催「原始及古代文化資料展覽會」に際し、日吉臺出土土器類及堅穴模型陳列さる。

昭・一三・三・一〇

日本文化史大系第一卷(原史文化)所收小林行雄氏「彌生式文化」(二一六頁)に日吉臺第一二一號堅穴の寫眞掲載さる。

昭・一三・八・八

本塾醫學部豫科動植物教室に開催の動植物學實驗講習會參加者約五十八名、堅穴群を參觀見學。

(三田評論第四九三號四九頁)

昭・一四・三・一〇

樋口清之氏「日本原始文化史」(九七頁)に、住居様式の參考寫眞として、日吉臺第一一號堅穴の寫眞を掲載さる。

昭・一四・四・一

本塾醫學部北里紀念醫學圖書館講堂に開催の東京人類學會日本民族學會第四回聯合大會にて、筆者は「神奈

川縣日吉の發掘に就て」と題し、第二期發掘の概況を幻燈使用にて解説する。

昭・一四・八・一〇 本塾醫學部生理學教室に開催の生理衛生實驗講習會參加者百十數名、日吉參觀に際し、筆者の説明により堅穴遺跡及び土器類を見學する。
(三田評論第五〇六號五一頁)

昭・一四・一〇・一

三田評論第五六〇號誌上に、奥田義雄氏「見學漫筆行」と題し、日吉堅穴の見學に就いても言及される。

昭・一四・一〇・一〇

日吉堅穴遺跡參觀者に配布用として、本塾監局より「日吉臺に於ける先史時代の住居址」と題するパンフレットを印刷する。

第三章 第一期發掘日誌

昭和十一年七月三日 曇

午前中は何にかと發掘諸準備に費し、午後一時いよ／＼發掘野外作業を開始、その第一鋤は先づ第一〇一號堅穴に打ち込まれる。

天氣は薄曇り、真夏の太陽の直射もなく上々の發掘日和である。第一〇一號堅穴は其の南半を第一校舍より體育會へ通ずる道路に切斷され、道路北側に露出せる斷面では、底邊幅約三米、深さは雜草の繁茂する黒土地表より約一米、ローム層上面よりは約四〇輝掘り込まれた堅穴である。

斷面は右の如くであるが、平面に於て如何なる程度に殘存して居るかは、黒土層を少くもローム層面まで掘り下げねば分らない。

人夫を督して黒土層を除去する事約三十分にして、道路北側より僅か半米の部分に本堅穴の東北壁が道路に平行して現はれ、その殘存部分の甚だ僅少なるを知る。聊か期待に反して本堅穴の發掘を中止し、直ちに第一〇二號堅穴の發掘に移る。

第一〇二號堅穴は第一〇一號堅穴の東南方約一五〇米に在り、體育會への道路東側に現はれた斷面では、底邊幅約三米三四、深さ

は地表下約六〇糰、ローム層面下約二七糰を示して居る。

午後一時半より約一時間、雑草を刈り黒土を除去するや、第一〇一號堅穴よりも缺損部分少きを知るも、露出した周壁部分では本堅穴の平面形は充分に知り難い程度である。それでも更に堅穴内の黒土を除去するに従つて、先づ彌生式土器口縁部現はれ、筆者自身その部分發掘に當る。土器周囲の黒土を靜に除くと、胴部徑約二五糰の廣口の壺が土壓によつて押し潰され可成り破損して居るが全破片は一個體を有し、而も土器内に河原から拾ひ集めて來たらしい色の綺麗な碁石大の小砂利十個が藏されて居るのを知る。やがて本土器の直ぐ近く、同じく堅穴の床面に高杯形土器の破損せるものが横倒しに發見され、更に少しく離れた場所には、胴部を全く缺損して居るのが遺憾であるが、羽状繩文を口縁部に裝飾せる優秀な彌生式土器の口頸部を發掘する。而も其の出土狀態は、口縁部を床面に接した即ち逆轉の位置である。

次ぎに柱穴を検出せんとして床面の清掃を行ふに、床上には木炭の薄い層や赤い燒土の層を隨所に見、燒土の層は厚さ平均四糰ほどであるが、中には一三糰に及ぶ所もある。是等木炭や燒土の層を除去するや、黒土の詰つた柱穴が赤褐色のローム層面に黒く二個所に現れる。柱穴の深さ一つは四糰、他は一五糰なるを知る。又、爐址が半分殘存して發見される。斯くて午後四時半、土器を原位置に置いた發掘現場の寫眞を撮影したり、圖面に記入したりして、五時過ぎ本堅穴の發掘を終了する。

この間筆者が小砂利を藏せる土器の發掘を始める頃より、手の空いた人夫をして第一〇三號の堅穴上部の雑草刈や黒土除去を行はしめるが、土器片多數出土するに及び發掘を中止、明日に延期する。〔使用人夫三名〕

昭和十一年七月四日 曼

午前九時より、昨日夕刻土器片多數出土するに及び發掘を中止せる第一〇三號堅穴の發掘を繼續、土器片の特に集結せる部分を残しつつ黒土を除去する。道路の東側面に現はれた本堅穴の斷面は、底邊幅約四米四〇、深さ地表下約七五糰・ローム層面下約四五糰をなして居る。今日からは清水潤三君も來られ實際の作業に協力してくれる。中食後床上面を清掃し、前記土器片以外に柱穴四個や自然石一個及び爐址の一部を檢出する。午後二時本堅穴の發掘を終了。

この間午前十一時、昨日殘存部分少しきため發掘を中止して置いた第一〇一號堅穴の一部を間崎教授發掘され、木炭及び土器片六個を採集される。午後二時第一〇三號堅穴の發掘終了するや、筆者は直ちに長野・清水・鈴木三君の協力を得て第一〇一號堅穴の發掘を續行し、更に多量の木炭や燒土を床面に發見し、午後三時發掘を完了する。本堅穴の燒土堆積は平均一糰の厚さであり、又、木炭の中には竹の焼けたものも檢出される。

又この日、筆者等が午後三時まで第一〇三號・第一〇一號堅穴の發掘に從事して居る間、保坂三郎氏人夫を督して第一〇四號堅穴の發掘を行ふも、本堅穴は第一〇一號・第一〇二號・第一〇三號堅穴などに比較すると、その殘存面積は至つて廣大であり、従つて作業の進展意の如くならず、午後三時第一〇一號堅穴の發掘を終つた筆者等は直ちに保坂氏に協力、約一時間半を経過して遂ひに一部分床部に達する。其間何等の特記すべき出土品なく午後四時半、掌大の扁平な自然石一個床上に發見、其の下に土器片を出土。午後五時に至り黒土除去の進展に伴つて、右の自然石が爐邊の石なる事判明する。更に爐址の輪廓が明瞭になると共に、清水君少しく窪んだ爐址内に土器脚部を發掘する。一方床上には柱穴二個所が判明、土器片及び爐邊に自然石更に一個出土し、五時半、夕闇の次第に迫る中に今日の發掘を終了する。尙、本堅穴の發掘着手前に、道路東側に見られし斷面は、底邊幅約四米、深さ地表面下約一米、ローム層面下約四〇糰であつた。本日は昨日に比して來會者多く、發掘作業は一段と活氣を加へた。「使用人夫三名」

昭和十一年七月五日 晴

午前七時、第一〇四號堅穴南側に接近せる第一〇五號堅穴の發掘に着手する。本堅穴は道路東側に見える斷面では、底邊幅五米三〇、深さ地表面下約一米・ローム層面下五〇糰の堅穴である。小時にして堅穴周壁部を判明するが、時間の都合上本堅穴の發掘は延期して全力を第一〇四號堅穴に向ける。

午前七時十五分、昨日夕闇迫りしたために中止せる第一〇四號堅穴の床上清掃を續行。筆者は昨日發見した柱穴の一つに關し、詳細に黒土を除去し、本柱穴底部には更に一段窪みのあるを認める。午前十一時半より午後三時過ぎまで、筆者は所用の爲現場を去るが、其間特記すべき事もなく、午後四時に至り、堅穴の一隅に土器を埋藏せる穴や柱穴更に二個が發見され、五時半本日の發掘を切

上げる。

本日は快晴で朝から真夏の太陽がヂリヂリと輝き、風も無い厳しい暑さの上に、筆者が発掘現場を一時離れねばならなかつたり、更に使用人夫も今日は一名減少して二名だつた事などよりして、発掘は意の如く進展しなかつた。〔使用人夫二名〕

昭和十一年七月六日 雨

雨模様を氣にしつゝ發掘現場に赴くに、雨は本格的に降り始め、野外發掘作業は遂に斷念する。種々の便宜上より今回發掘の土器類は、田園調布の筆者自宅研究室へ持參し、洗滌・分類・整理其の他の室内作業を行ふ事とする。土器片には、洗滌後第一〇一號堅穴出土のものより順次墨にて算用數字を附ける。又、この頃塾當局に於ては、今秋ハーヴィード大學創立三百年祭に際して小泉塾長渡米に付き、ハーヴィード大學へ本塾より日吉臺出土土器類の一部を寄贈する案が決定される。

昭和十一年七月七日 曇

本日は第一〇四號堅穴の外部に若し柱穴あらば其の位置を知らんと、午前七時より人夫を督して堅穴周邊部に沿つて堅穴外方へ約一米、黒土をローム層まで除去する。午前十一時、學校當局より依頼の下津佐寫眞師、發掘現場寫眞(註一)を撮る。午後二時に至り、柱穴らしきもの二個所に現はれるが、遺憾ながら何れも原形を竹の根により甚しく攪亂破壊され、是等が當時の建築を考察する資料たり得るや否や問題である。斯くて夕刻本堅穴の發掘を終了する。〔使用人夫二名〕

註一 ハーヴィード大學へ寄贈ノ寫眞帖「KEIO GJUKU UNIVERSITY 1936」ハ掲載サル。

昭和十一年七月八日

五日の朝に堅穴周縁部のみ明かにして放置せる第一〇五號堅穴を、午前八時より發掘續行する。本堅穴は殘存面積僅少にて、黒土除去は手間取らず、午前十一時には床部に達し周壁面も露出し、特殊形の堅穴一個現はれ、その内部には土器・小石各一片を出す。發掘された堅穴も日を追つて數を加へて行くので、種々便宜のため今日より各堅穴に木製堅穴番號札を立てる。

午前中に第一〇五號堅穴が片付いたので、午後一時よりは第一〇六號堅穴の發掘を開始し、四時まで黒土除去作業を行ひ土器片十

數片を出すが、可成り耕作による攪亂を受けて堅穴周壁部や床面判然とせず、本堅穴の發掘を斷念する。夕刻、東京日日新聞の記者及び寫眞員來り、第一〇四號・第一〇五號堅穴附近を撮影する。又、今日は三田新聞第三五五號紙上に發掘記事を見る。「使用人夫三名」

(第一一一號堅穴の位置推定)

昭和十一年七月八日夕刻、明日は筆者終日休養する事となるので、豫め松本(信)教授及び清水潤三君と明日の發掘地點に關して種々打合せを行ふ。

今回發掘して來た第一〇一號より第一〇六號までの堅穴は、何れも道路開鑿により其の原形の一部が大なり小なり缺損消失して居り、完全な形に於て發掘されて居るのでは無い。其處で何とか原形の完全な堅穴を發掘したい事は誰しも望む所であつた。けれども當地の堅穴は、千島やカムチャツカ等の方面の堅穴に見る如く、窪地をなして地上より其の位置を認められるのでは無い。従つて例へ雜草を刈り取つて地面を眺めた所で、堅穴遺跡が何處に埋存して居るかは見當がつかないのである。しかしながら我々は飽くまで完全なる堅穴發掘の希望を捨てず、色々と其の地表よりの位置推定を試み、次の諸事實に基いて一つの結論を得たのである。

(一) 第一に、當地丘陵上には道路開鑿によつて多數の堅穴が斷面を露出し、尙多くの道路に破壊されざる堅穴の存在が充分に豫想出来る事。

(二) 次に堅穴の分布狀態を見るに、第一〇二號・第一〇三號堅穴間、第一〇三號・第一〇五號堅穴間、第一〇六號・第一〇七號堅穴間、第一〇八號・第一一〇號堅穴間、何れも殆ど二十米の間隔を示し、而も第一〇三號・第一〇五號堅穴間には第一〇四號堅穴があり、又、第一〇八號・第一一〇號間には第一〇九號堅穴が存在して居る。

(三) しかるに第一〇二號・第一〇三號堅穴間の道路兩側には堅穴断面を露して居ない。即ち堅穴の直徑は平均四米餘で、道路の幅員は約五米であるから、道路幅員より直徑少なる堅穴が丁度道路に當つて完全に消失したのでは無い限り、第一〇二號・第一〇三號堅穴間の附近には、堅穴が存しても不都合では無く、若し在りとすれば道路の南側か北側か何れかである。

(四) けれども南側は道路より約五米附近より急斜面をなし、而も斜面と道路間の黒土層は地均工事によりローム層まで削除されて居るので、若し是處に堅穴ありとせば、丁度東京市大森區久ヶ原の住宅地開鑿の際に於いて見られた如く、ローム層面に堅穴の部分だけが黒く黒土を残し、黒土の部分にのみ特に雑草の繁殖を見て、一目其の位置を認知出来るのであるが、斯かる事實は是處には認められない。

従つて結論として、道路北側の第一〇二號・第一〇三號堅穴間の部分が、最も堅穴埋存の場所として有望視されるのである。唯、この部分には、雑草繁茂する中に現在の新道に平行して細い舊道があり、この舊道の西側に沿つて一列に茶ノ木の植込みが存して居るので、假に其の附近の地下に豫想通り堅穴が發見されたとしても、茶ノ木の爲に完全なる堅穴の發掘は困難であらうと云ふ心配も存した。けれども我々は物は試しで明日より此の部分に推定發掘を斷行する事に決し、具體的には先づ第一〇二號・第一〇三號間の新道路東側に道路より約四米の所へ道路に平行して幅約半メートル・深さ約六〇センチの試掘溝を掘る事に定めたのである。

昭和十一年七月九日 曙後雨

本日は清水君が代つて主として人夫を督し發掘作業を續行する事になつて居たのであるが、推定通りに堅穴が現れてくれるや否やが氣に掛り當抵家に引込んで休養などして居られず、それに今日は學校から理事も來られるとの由に、午前九時現場に赴く。はたして豫定の第一トレンチに土器現はれ、清水君が其の底部の缺損せる部分に丁度竹の根が突通つて居るので採掘に苦勞して居られる最中であつた。而もトレンチの北部は深さ五〇センチでローム層に達して居るのに、南は尙黒土層であり、その境界線が堅穴の西北部周縁なる事判明し、トレンチを更に南進せしめるや遂に西南部周縁も認知され、第一一二號堅穴の存在は確實となる。

晝頃より雨が次第に降り出し、午後は發掘休止となる。「使用人夫二名」

昭和十一年七月十日 曙後雨

本日は第一一二號堅穴附近の雑草刈取りや茶ノ木の引抜きを行ふ。この間に間崎教授は發掘現場より離れた寄宿舎方面の臺地で、

打製石斧(註二)一個と彌生式土器の平底部一個を地表採集される。人夫は土器よりも刈取る雑草の中に山芋を發見して喜ぶ。午後は雨天と

なり野外作業を休止し、午後は筆者研究室にて、昨日清水君の發掘せる土器の石膏補修など室内作業をなす。〔使用人夫三名〕

註二 ハアバード大學へ寄贈ス。

昭和十一年七月十一日 晴

本日は第一一二號堅穴の東縁部の位置を判明せしめんとし、三名の人夫をして、第一トレンチに直交する三條の第二・第三・第四トレンチを、深さ約七〇釐・幅半米・各トレンチの間隔約半米として東方へ向つて掘進せしめる。三線に分れて掘進する三名の人夫は、午前七時より能率よき作業を續け、遂ひに夕刻に至り各々東部周壁に達し、その位置明瞭となり、試みに第二トレンチの一部を床部まで掘り下げて見た結果も豫想通り土器片が出土する。斯くして本堅穴が少くも直徑八米以上なる事が確定し、その大規模なるに驚くと同時に、斯かる堅穴を發見し得た事を喜び合ふ。〔使用人夫三名〕

昭和十一年七月十二日 晴

本日は第一一二號堅穴西方周邊部を明かにするべく、人夫一名をもつて九日に判明せる西南部周邊部より周縁に沿つて西方に掘進せしめ、又一方では北方周邊部を明にするべく第四トレンチ中央より北進する第五トレンチを掘鑿せしめる。本堅穴の大規模なるにより今日は人夫も六名に増加したので、殘る四名に對しては第二トレンチ南部の堅穴内黒土を除去せしめ、堅穴内に約四〇釐の黒土を殘して大體南西部分の堅穴周邊部明瞭となる。其間可成多數の土器片を出土する。夕刻、北方周邊部も判明し本日の作業を中止する。〔使用人夫 六名〕

昭和十一年七月十三日 雨

雨天のため發掘中止。

昭和十一年七月十四日 晴

炎天に悩まされつつ、現地表下七〇釐まで黒土を除去するに勉める。黒土運搬の便を考慮して特に第二・第三トレンチの間は其儘に取残し、次第に掘下げられる堅穴内部より外部地表への斜面通路とする。夕刻、この通路部分を除いて、本堅穴の周壁上縁部を全

部露出するに成功し、本堅穴が最大徑南北九米四〇・東西八米にも及ぶ大規模な橢圓形住居跡なる事が判明する。この間土器片稀に出土する。〔使用人夫六名〕

昭和十一年七月十五日 晴

本日は炎天酷暑を避けて早朝六時より作業開始、昨日同様黒土運搬作業用斜面部分は残して、第一一二号堅穴東半部を床部まで掘り下げる。この結果、堅穴中央より稍北に焼土を發見し爐址の存在を認め、更に本堅穴に相應しい大柱穴二個所に現はれる。尙、本堅穴は當初心配された如く、丁度堅穴を南北に貫通せる茶ノ木の植込みの根が意外に深く、本堅穴の南北周壁部のみならず、床部や爐址も南北一線に切込まれて居る事は誠に遺憾であるが、我々は道路開鑿によつて少しも缺損を受けない、而も斯かる大規模な堅穴を發見し得た事で充分満足せねばなるまい。今日は發掘作業の一方、本堅穴の永久的保存方法に就いて種々論議が行はれる。〔使用人夫六名〕

昭和十一年七月十六日 晴

晴天ではあるが、お盆で人夫休業の爲發掘作業も亦休止する。

昭和十一年七月十七日 晴

午前七時半より、第一一二号堅穴内に殘れる黒土一切を除去するに全力を盡す。けれども十五日に發掘せる東半部と異なり、西半部に於ては床部に接近するに従つて土器片の出土多數となり、午前中は發掘作業遅々として進展せず、午後に至り漸く床面に達し、十五日發見の大柱穴と相對する位置に更に二個の大柱穴現はれ、床上に四個の親柱を立てた事が歴然とし、續いて小柱穴三個所並びに用途不明の穴一個所に現はれる。更に大柱穴に詰れる黒土を除去するや、午後三時其の一からは石斧と覺ぼしきもの一個が現はれ、

午後五時半本堅穴の發掘を終了、同時に今回の發掘も本日を以つて終幕となる。

顧れば本月三日第二〇一號堅穴の發掘を開始してより今日まで丁度半月である。暑中休暇を利用して炎天酷暑の下に發掘野外作業を無事は處まで成し遂げ得た事は、發掘現場が作業上に種々便利な豫科敷地内であつたり、又、學校當局の理解ある援助があつた事

にも因るが、同時に發掘に從事した三田史學會員一同の力強い學的良心と緊密なる協力精神とをも無視する事は出來ないであらう。額に汗し、手足を泥だらけにして働いて居る發掘現行員と、毎日炎天の中に立ち盡して作業員を種々慰勞激勵するに勉める史學科諸教授との涙ぐましい程の協力と熱意こそは、永久に三田史學會の誇りであり、この協力と熱意こそは今後更に大なる學的事業を遂行せしめる原動力となるであらう。

この日學校當局より依頼の下津佐寫眞師來り、一同記念撮影をなす。(ハーバード大學へ寄贈ノ寫眞帳「KEIOGIJUKU UNIVERSITY 1936」及ビ三田評論第四六八號誌上ニ掲載サル) 今日に限つて松本(信)教授が所用のため殘念ながら缺席される。「使用人夫六名」尙、本發掘參加者及び參觀者は左の如くである。(敬稱略)〔數字ハ來會日數〕

西岡秀雄(12)	松本信廣(11)	清水潤三(10)	中井信彥(10)
間崎万里(9)	今宮新(5)	有賀春雄(5)	松本芳夫(4)
會田倉吉(3)	川村善三郎(3)	鈴木泰平(2)	永野浩三(2)
相内武千代(2)	西脇順三郎(2)	小川鉢一(2)	猪原安(2)
森貞成(1)	保坂三郎(1)	大給尹(1)	高橋磧一(1)
浅村一郎(1)	神尾重砲(1)	松尾善郎(1)	齋藤咸(1)
楨智雄(1)	板倉卓造(1)	小林澄兄(1)	輝井伊豆(1)
井上芳郎(1)	中西定雄(1)	新館正國(1)	加藤元彦(1)
平山榮一(1)	持田盛二(1)	守屋謙二(1)	Schenck夫妻(1)

又、本發掘に就いて次の諸新聞に報道される所があつた。

昭和十一年七月八日　　三田新聞(第三五五號)

昭和十一年七月九日　　東京日日新聞附錄「神奈川東日」(第二一五三二號)

昭和十一年八月一日 東京日日新聞（第二一五五五號）

昭和十一年八月二日 時事新報（第一九一〇六號）

昭和十一年八月二日 大阪毎日新聞

昭和十一年八月五日 東京朝日新聞「神奈川附錄」（第一八〇七一號）

昭和十一年八月十四日 東京日日新聞

昭和十一年九月二十八日 三田新聞（第三五八號）

昭和十一年十一月三日 中國新聞

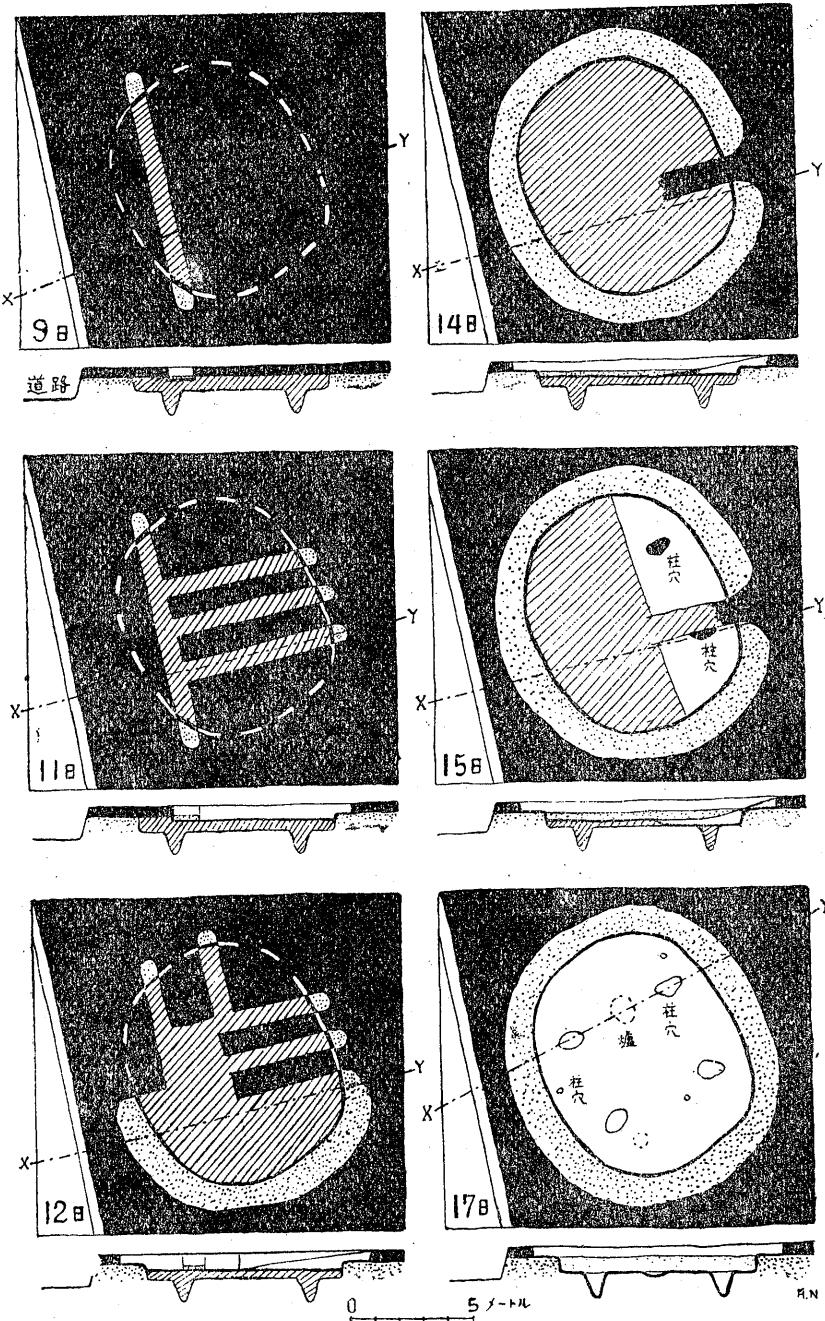
昭和十一年十一月三日 東京日日新聞

附記……第一二一號堅穴發掘と其の不用土壤の運搬

第一二一號堅穴遺跡の地下に於ける位置推定に關しては、昭和十一年七月八日の前記日誌に述べたし、更に試掘溝が掘られて本堅穴が發見されるまでの過程も亦發掘日誌に詳細したが、茲には今後の發掘方法に關する一資料として、特に土壤の排除運搬に就いて附記して置く。

即ち第一二一號堅穴の如く最大徑南北九米四〇・東西徑八米にも及ぶ、換言すれば面積十七坪強（三十五疊敷）もある堅穴の發掘に於ては、豫め餘程其の發掘方法に就いて考慮し、能率的な作業を行はねばならない。而も學術的發掘であるから、遺物の出土位置を出来るだけ正確に即ち水平的に又垂直的に記錄しなければならず、同時に遺蹟・遺物の破損を豫防しなければならない。従つて一般的には上層より漸次不用部分を除去するのが最善の方法である事は論を俟たない。けれども上層から發掘を試みる事は次第に發掘面が低下して行く事であり、それは必然的に土壤の排除運搬の不便を招くに至る。又、不用土壤の放棄場所に就いても豫め注意しないと、後になつて再び他の場所へ排除しなければならない様な、二重にも三重にも無駄な勞費を見る場合がある。更に又、土壤と云ふものが掘出されると、其の當初は容積が一般に二倍乃至三倍に増加する事を忘れてはならない。従つて第一二一號堅穴の如きは、面積に於て約十七坪強、深さに於て約一米を掘下げるのであり、即ち其の除去する土壤の容積は約十立方間であるが、これを實際に

掘出すると容積は増加して大約三十立方間、換言すれば普通の八疊間五室を充填する程の多量となるのである。其處で本堅穴發掘に當つても、先づ速にトレンチを掘つて其の大きさを知り、而して其の排除する土壤の容積を概算し、其れに相應せる相當廣範圍の放棄場所を、後で不便を來たさない所に選定しなければならなかつた。即ち昭和十一年七月十一日、五本のトレンチにより堅穴の大きさを大體知り得た我々は、翌日より發掘土壤の放棄場所を堅穴の東方に選んだ。これは、堅穴の西方に新道路あり、南北兩方面には既に第一〇二號・第一〇三號堅穴が發掘されて居る爲、當然堅穴東方の空地を利用せざるを得なかつたのである。而して發掘の進展につれて發掘面が低下しても



附圖第三 日吉臺第一一號堅穴發掘經過圖

尚ほ、使用人夫は必要に應じて増減し、少い時は二名、多い時は六名を數へた。人夫は勿論綿密な手心を要さない部分に對してのみ、適當に指導して作業を行はしめるのであるが、それで

も用具は一般にスコップを用ひしめ、根切り・鍬などの使用は特別の場合にのみ許可し、又、排棄土壌の運搬は畚によつた。第一二一號堅穴發掘に當つては、人夫の性質によつて掘鑿係と運搬係とに分業せしめ、ともかくも炎天酷暑の下に前述の如き方法をもつて、大規模な發掘を比較的短時日に遂行し得たのである。参考のため第一一一號堅穴發掘經過を圖示して置く(附圖第三參照)。

第四章 堅 穴

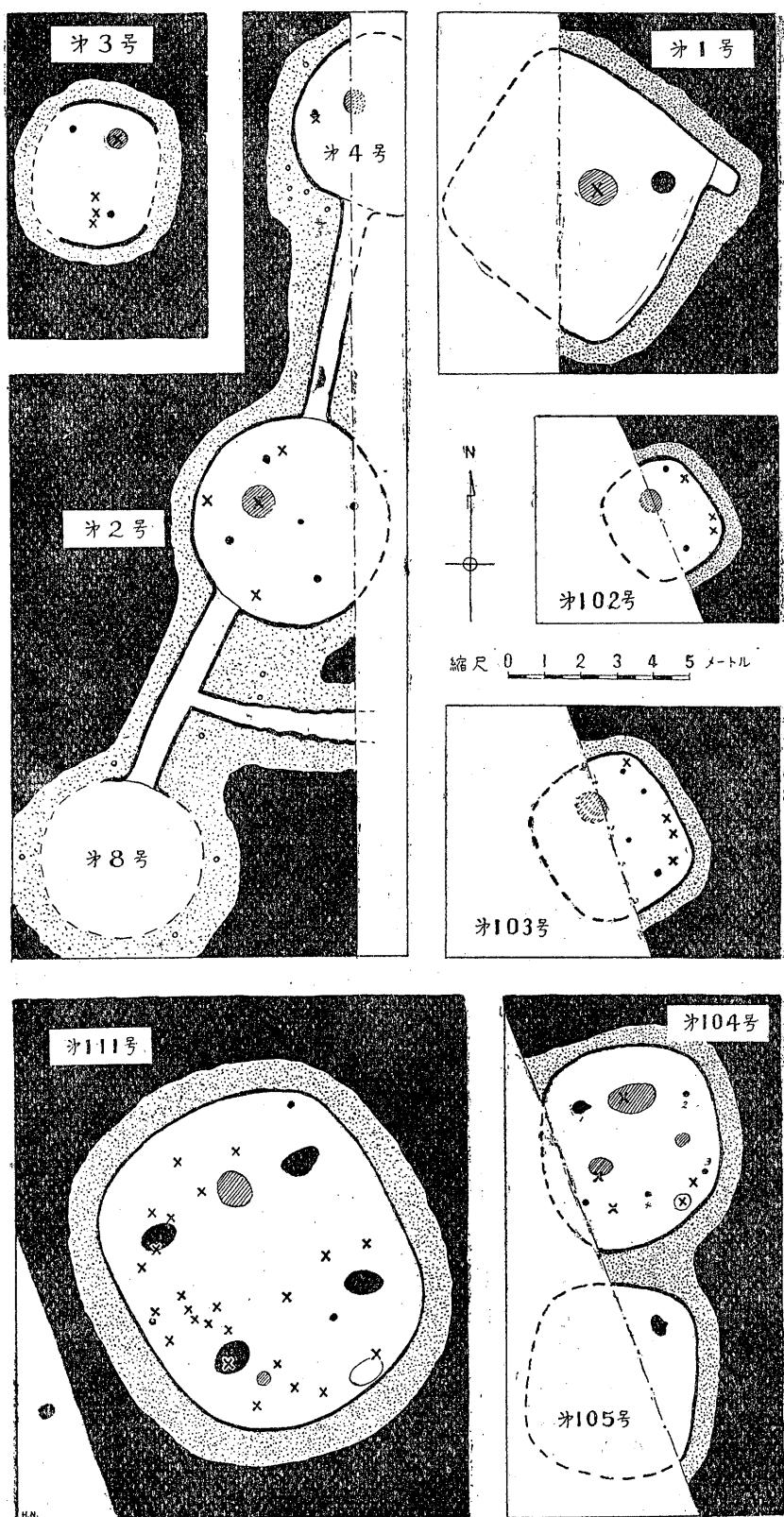
第一節 平 面 形

日吉臺に於て發見された堅穴は三十基以上にのぼるが、其の中特に發掘された堅穴は、前述の如く昭和七年五月第一期發掘の十基(第一號より第一〇號堅穴まで)及び昭和十一年七月の第二期發掘の七基(第一〇一號より第一〇六號まで並びに第一一一號堅穴)の合計十七基である。而も是等十七基の堅穴の中、第二期發掘の第一一一號堅穴のみは、道路開鑿によつて偶然發見されたのと異なり、豫め地上より其の位置を推定して發掘したのであるから、道路開鑿によつて破壊缺損して居ない。けれども其他の堅穴は何れも其の原形を缺損し、従つて其の平面形は殘存部分に依つて推定しなければならない。中には破壊缺損著しく其の推定困難な堅穴もある。

平面形の明瞭なもの及び推定可能の堅穴を一括圖示すれば附圖第四の如くであり、要するに日吉臺の彌生式堅穴には、方形・橢圓形・圓形に類する各種の平面形が見られ、決して一様ではない。けれども

附圖第四 日吉臺彌生式堅穴平面圖

(●……柱穴 ○……爐 ×……穴 ×……土器出土地點)



特に方形と圓形の中間を行くが如き堅穴が多い事は注意を要する。

第二節 深さ

日吉臺は第三紀洪積層臺地であり、厚い關東ローム層の上に平均半米ばかりの腐植土即ち所謂黒土が覆つて居る。そして堅穴はローム層面より一般に四〇糀乃至五〇糀を掘り下げて作られて居る。従つて

堅穴床面は現地表面より一般に約一米の深さに位置して居る。尙、堅穴家屋建設當時の地表面よりの深さは、黒土が當時ローム層上に如何なる厚さに覆つて居たかを詳にしないので不明であるが、當時の黒土層を現在の約半分と假定すれば、堅穴の深さは當時の地表面より七〇乃至八〇糢と思はれる。

第三節 面積

堅穴の面積は、第一一二號堅穴を除いて、其の推定平面形に基いて計算するのであり、従つて正確は期し難いが、大體小なるものは第三號堅穴の如く四坪弱のものより、大は第一一二號堅穴の如く十七坪強に及ぶものまで色々であり決して一定して居らない。けれども一般には五坪以上十坪位までが普通であり、十坪を超えるものは少ない。特に第一一二號堅穴の如きは、最大徑南北九米四〇・東西八米に及び、これは類例少なき大規模な堅穴である。東京市大森に土木工事中現はれた堅穴は斷面にて直徑十米と報告されて居る^(註三)が、完全に平面形が發掘された彌生式堅穴としては、日吉臺の第一一二號堅穴は日本に於ける最大のものと云はれる。即ち、本堅穴が發掘された當時大々的に新聞紙上に喧傳され、又、學校當局によつて多額の費用を惜まず永久的保存工事がほどこされたり、或は又、その模型がハーバード大學に寄贈されたりした所以である(寫真第一參照)。

註三 桑山龍進「大森望翠樓ホタル址彌生式遺跡」先史考古學第一卷第一號一八頁

第四節 柱穴

日吉臺に發掘された堅穴を綜合して見るに、堅穴床面に柱を建てなかつた堅穴は無い様に思はれる。

第六號・第八號・第九號・第一〇一號・第一〇六號の五個の堅穴には、柱穴を發見しなかつたが、是等は堅穴の平面形が完全に殘存したものでなく、即ち發掘調査し得た部分が僅少であり、又、第八號・第一〇六號堅穴に見る如く、後世の耕作の結果著しく床面が破壊されたものもあり、吾人の發掘調査では柱穴を發見し得なかつたと云へども、完全な舊態に於ては恐らく他の十二基の堅穴同様、柱は床上に建てられた事と推察される（附圖第四・第五、寫眞第一參照）。

柱穴の數に於ては、右五基の堅穴を除いては何れも一個以上の柱穴が發見され、多いものは、第一一號堅穴に大少七個の柱穴を數へ、第一〇四號に六個、第二號に五個の柱穴を検出して居る。而して第一一號及び第二號堅穴の如きは、柱穴の太さより主柱は四本、他は補助支柱と見られ、この主柱四本であるのが最も普通の型式と思はれる。第一〇四號堅穴の如きは六個の柱穴の中、主柱は一個とも推察されるが、之れは異例に屬すると思はれる（詳細は本章第七節參照）。

又、第二號・第四號・第一〇四號堅穴の外周部に於ては、不規則ながらローム層上に柱穴らしきものが僅かばかり發見されて居る。けれども第一〇四號堅穴外周部に現はれた二個の穴は、木の根に攪亂されて柱穴なりや否や不明である。

第五節 爐 附

爐は、第一〇號・第一〇五號・第一〇六號堅穴の如く破壊缺損著しいものには發見し得なかつたが、他の十四基の堅穴には何れも一個以上の爐址が検出されて居るから、恐らく右の三基も完形であつたら爐址を發見し得た事と推察される。全體を通じて一個乃至二個の爐を有する堅穴が多く、三個以上は少ない様である（附圖第四参照）。

爐の構造は、一般に床面を直徑半米乃至一米位の皿狀に約十糀ほど掘り凹めたものに過ぎないが、中には第一號堅穴に見る如く、爐内に小石を敷詰めたもの、或は又、第一〇四號堅穴に見る如く、爐邊に掌大の石を置いたものなども發見されて居る。

又、用途に於ては、特に暖房用とか炊事用或は工作用などの區別は認められず、恐らく混用したであらうが、ともかく赤く土壤の焼けた爐内からは木炭を多量に出すものあり、又、土器を据置いた事も認められる。特に後説する土器底部に脚部を有するK類土器は、第一〇四號堅穴の爐内からも出土して居るが、斯る土器は特に五德の無い當時便利な土器として使用された事と思はれる。

尙、爐の位置は、其の性質上火災を起さぬ様に、柱や或は屋根の低下すると思はれる堅穴周壁部を避けて居ることは論を俟つまでもない（附圖第四参照）。又、爐は堅穴家屋への出入を妨害するが如き場所に設けられるとは考へられないから、爐の位置は消極的に堅穴家屋の出入口の所在を暗示してくれる場合もある。特に第二號堅穴の南北には、第四號及び第八號堅穴へそれぞれ接續する通路様の溝があるが、

第二號堅穴に於て、爐の位置が西側に片寄つて、南北を空けて居る點は注意せねばならない。（附圖第四参照）

第六節 其の他の遺構

日吉臺の堅穴の中には前記柱穴や爐址の外に特殊の遺構を認め得るものがある。

即ち第一號堅穴に於ては、堅穴東隅に巾約五〇糪・奥行六六糪の壇状切込部あり（附圖第四参照）、用途は不明である。

又、第二號・第八號堅穴間及び第二號・第四號堅穴間には、各々堅穴間を接續する通路様溝が發見さ

れて居り、前者は巾約八〇糪・長さ五米七〇糪、後者は巾約六〇糪・長さ六米三〇糪である（附圖第四参照）。

この種の溝は嘗て東京市大森區下沼部にも發見された事があると云ふ。

又、第一號堅穴内の東南周壁部に沿つて不完全な溝が發見されて居る（附圖第四参照）。これは排水溝と見るべきか詳にしない。

更に又、第一〇四號・第一一二號堅穴の床上には、柱穴とは認め難い穴が周壁部に接近して穿たれて居り、特に前者の穴からは廣口の土器が正位置に發見されて居り、それは一見、土器の轉倒を防ぐために床上に埋めた觀がある。穀物其の他の食料品を貯藏したのかも知れない。

第七節 骨組の研究

最近考古學の發達につれて、堅穴住居址の研究も相當に進み、土器の調査と相俟つて、堅穴の平面が圓いとか四角いとか、いや橢圓だ闊の丸い矩形だ等と云つた事を論議して、其の編年學的研究の如きも試みられるに至つて居るが、更に一步を進めて家屋の構造特に骨組にまで言及して居るものは極めて僅少である。この點に於て、近年雜誌「ミネルヴァ」第二卷第一號（昭和十二年一月發行）に所載された、關野克氏の「堅穴家屋と其の遺蹟に就ての理論的考察」と題する、即ち同氏の所謂堅穴家屋の構造に關する理論的體系と、今迄に報告された實際の遺跡との關係に就いて述べられて居る研究は、甚だ尊重すべきものと云へるであらう。次に日吉臺に發掘された比較的舊態を存する第二號・第一〇四號・第一一一號の三基の堅穴に就いて、其の骨組を右の關野氏の所論にも關聯しつゝ考察して置く。

第二號堅穴は筆者自身發掘に從事したのでは無いが、橋本・森兩氏の報告に依れば、其の平面は直徑約五米七十糀の圓形にして、東西南北の四方と其中央との五個所に柱穴が發見されて居る（附圖第四參照）。是等五個の柱穴の直徑及び床面よりの深さを表示すれば上表の如くである。

柱穴	直 径	深 サ	位 置
5 4 3 2 1	二七糀二 二四糀二 二一糀二 三〇糀三 九糀〇	三〇糀三 三三糀三 二七糀二 三三糀三 三〇糀三	東 北 西 南 中央

深さに於ては柱穴何れも三〇糀前後にして大差無きも、直徑の點では四方に位置する四個の柱穴が、中央の柱の九糀に比して遙かに大きくな約二一糀乃至三〇糀を示し、本堅穴の親柱を立てゝ居た事が知られ

る。是等の柱穴を基礎とする本堅穴家屋の骨組を複原想像すれば附圖第五右上の如くである。

即ち本堅穴は關野氏の所謂 fP_+ 型と cP_0 型の複合型となる。關野氏は既に『時には二者複合する場合も想像される』^(註四)と述べられて居るが、最早や想像では無くして、明かに其の實例を吾人は見出したのである。そして更に興味ある事は、後期繩文式堅穴に於て、關野氏の所謂 cP_0 型や fP_0 型の圓形堅穴が多く見られ、一般彌生式住居址には隅の丸い方形堅穴、即ち典型的 P_+ 系が多い事を考へ合はせると、この日吉臺の即ち fP_+ 型と cP_0 型の複合型なる第二號堅穴を以つて、一見繩文彌生兩式の過渡期に屬するものと假定出来るかも知れない。けれども編年學的研究としては、住居址の平面形や骨組だけに論據を置く事は無謀であり、本堅穴より出土せる彌生式土器や殊に鐵片三個の發見されて居る事實其の他を考慮し、更に今後の慎重なる研究に俟たねばならない。要するに本堅穴は今後の堅穴住居研究に關する重要な一資料たる事を記し置くに留める。

尙、本例に關聯し、彌生式堅穴では無いが、日吉臺の本堅穴より程遠からぬ西北約一五〇〇米附近に位置する、横濱市神奈川區下田町(東)貝塚に、堅穴の平面方形にして而も四方と中央に柱穴を有する、 fP_+ 型及び cP_+ 型の複合型の前期繩文式堅穴が發見されて居る事も参考までに附記して置く。(酒誥・江坂・芹澤「横濱市神奈川區下田町(東)貝塚に於ける一住居址の發掘に就いて」考古學雜誌第二七卷第一號參照)。

日吉臺の第一〇四號堅穴は、甚だ不規則な圓形をなして居り、五個の柱穴も亦不規則な配置を見せて

居る（附圖第四参照）。五個の柱穴の直徑及び深さを表示すれば上の如くである。

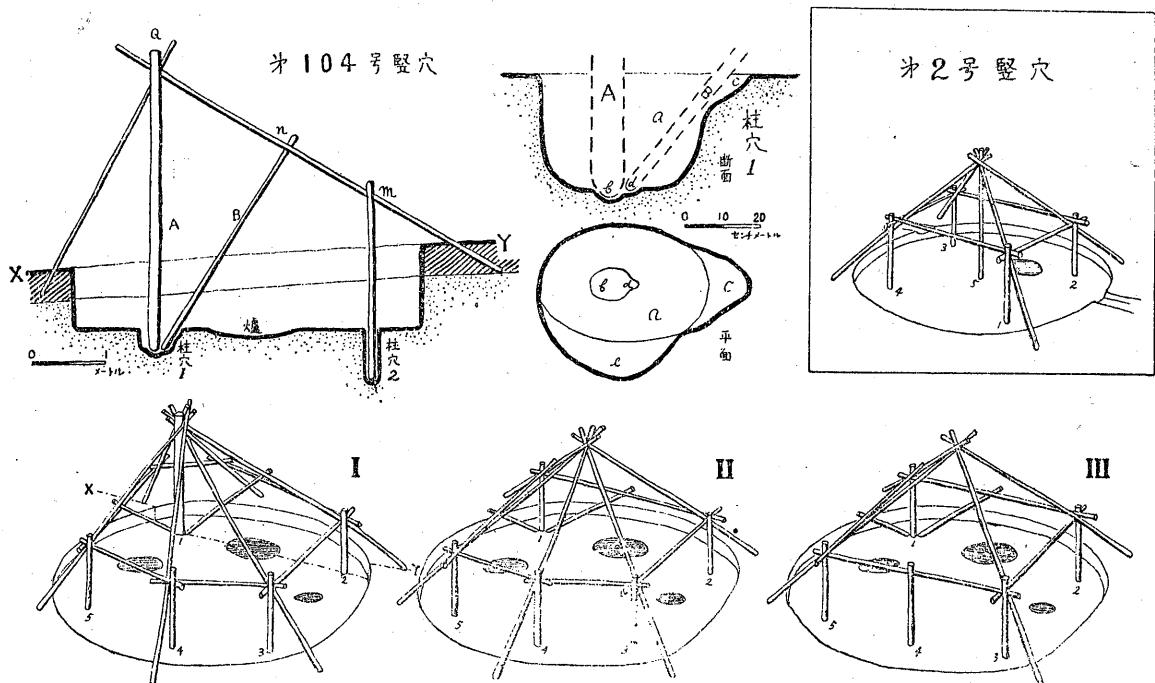
柱穴	直 径	深 サ
1	二〇 磅	三三 磅
2	一五 磅	七〇 磅
3	一五 磅	七二 磅
4	一五 磅	三七 磅
5	一五 磅	七〇 磅

上表に依つて明かなる如く、1號を除く2・3・4・5號の四個の堅穴は何れも直徑一五磅にして、深さも4號のみ三七磅にて稍淺いが他は七〇磅程度である。然るに1號のみ右の四柱穴とは異なり、附圖第五に見る如く、a部とb部とよりなる二重の穴をなし、更にa部及びb部の北縁部には窪みe部とd部を有して居り、a部は尙其の東邊にも窪みe部を持ち、甚だ注目すべき形をなして居る。

即ち本柱穴を詳細に觀察すれば、明かにb部に於て直立する比較的太いA柱と、d部よりc部を通る斜行せるB支柱の存在を想像し得る。そしてe部の存在も亦、東へ向ける斜行支柱があつた事を示すのかも知れない。而して本堅穴の骨組には大約三様式の想像が許される。

今1號柱穴を以て第一〇四號堅穴の親柱Aを立てたものと假定すれば、他の柱穴と關聯して附圖第五Iの如き骨組が想像される。即ちA柱を中心 $2 \cdot 3 \cdot 4 \cdot 5$ 各柱穴に直立する支柱に向つて、放射状に降棟が設けられ、特に附圖第五に示すが如く親柱Aを立てる1號柱穴よりはB斜行支柱が出で、A柱と2號支柱を結ぶ降棟とn部分に於て結着される。平面圖に於てd c線を延長すると2號柱穴を通過する事が、此の想像を裏書きして居る。斯くして1號柱穴を本堅穴の親柱Aを立てたものと假定するならば、屋根の頂點はA柱の上端Q點となり、其の屋蓋は頂點が中心にない片寄れる圓錐形たるを免れない。

附圖第五 日吉臺彌生式堅穴家屋骨組假想圖



次に1号柱穴のみを以つて特に親柱と見做さず、五個の柱穴を同等の支柱を立てたものと假定するならば、附圖第五Ⅲの如く關野氏の所謂 fP_0 型の稍不規則な型式ともなる。

更に又、4号柱穴は3号と5号柱穴との間に位し、而も其の深さは2号・3号及び5号柱穴より稍淺き事實よりして、是れを支柱の柱穴と見なし、正方形の四隅に位置する1・2・3・5号の四柱穴を以つて主柱の柱穴と見做せば、

附圖第五Ⅲの如き骨組が想像され、關野氏の所謂 fP_+ 型の異例ともなる。

本堅穴の骨組が以上三様式の何れであつたかは早急に決定し難いが、何れにしても、本堅穴が斜行支柱換言すれば所謂スヂカヒを有し、骨組の補強工作を試みて居ると思はれる點は注目せねばならない。又、本堅穴は何れにしても現代人が考へる程、當時の住居建築が理論的體系に其の儘當てはまるものでは無く、其の平面も甚だ不規則であり、

柱も主柱・支柱を問はず相當自由に配置設立して居る事を示して居る。

又、第一一一號堅穴は大規模な而も完全なる形狀に於て發掘され、其の平面形は橢圓と云ふより隅の丸い稍長方形をなし、床上に殆ど正四角形を描く如く四個の大柱穴を有し、既に關野氏は本例を以つて fP₊型の實例として指摘されて居る様であるが^(註五)、本堅穴には附圖第四に明かなる如く、四個の大柱穴以外に更に不規則なる位置に尙三個の小柱穴が發見されて居る事を等閑視してはならないのである。是等の小柱穴は、アイヌの住居や萬葉集（卷十四雜歌）に

湊のや葦がなかかる玉小管

莉り來わが背子床の隔に

とある様な、當時の家屋に於ける簾等による簡単なる區劃を設ける爲に柱を立てたものか詳らかでは無いが、本堅穴を以つて純粹なるfP₊型とは云ひ難い。而も爐の位置は中央にあらずして離れて二個所に在り、又、右の如く不規則な小柱の發見せられて居る事實は、當時の家族制度に關聯して家屋に於ける間取發生の重要な資料と思はれる。更に、本堅穴の原始的内部生活配置を複數と假定すれば、當時の家族制度に就ても一つの證左となり、或は本堅穴が農耕文化に屬する彌生式堅穴であるだけに、農耕民族にして表はれる共同大家屋としての所謂氏族家屋 (SIPPEN HAUS) 發達の胚胎期的所産とも見做され、同時に關東の此の日吉臺に彼等の生活が展開された實年代に想ひを到すと、我が古代史上の氏族制度の問

題と無關係には取扱はれず、誠に古代社會史上或は又編年學的研究上に興味あるものと思はれる。

要するに、堅穴住居の家屋構造の實際は、それが例へ建築學上からは原始家屋であるにせよ、家屋と云ふものが、人間の衣食住の一要素をなし、複雜な環境と社會生活或は又家族制度を反映して居る限り、吾人は餘程視角を大にして今後の研究を進めなければならない。殊に編年學的研究に於ては其の要を認め、換言すれば土器とか堅穴の平面形の形態學的研究のみを以つて、直に編年學的研究の如く錯誤してはならないのである。

註四 關野克「堅穴家屋と其の遺蹟に就いての理論的考察」ミネルヴァ第二卷第一號二四頁

註五 右書二六頁

第五章 遺 物

第一節 土 器

日吉出土彌生式土器 完形土器(複原土器ヲ含ム) 土器破片(徑一釐以上)	第一期出土分			合計
	第二期出土分	第一期出土分	第二期出土分	
		二九	一	三〇
總 數	一四二〇	一一二五	二五四五	

日吉臺に於て調査された堅穴からは、彌生式完形土器の出土は少ないが、現在までに發見された土器は第一表の如く相當の分量にのぼつて居る。

日吉臺に發見された完形乃至これに準ずる彌生式土器を總覽すると、器形に依つて第二表の如く大約

A・K・B・S・Tの五種類に分類出来る。

日吉臺出土彌生式土器形態分類表

脚部無きもの

頸部廣く

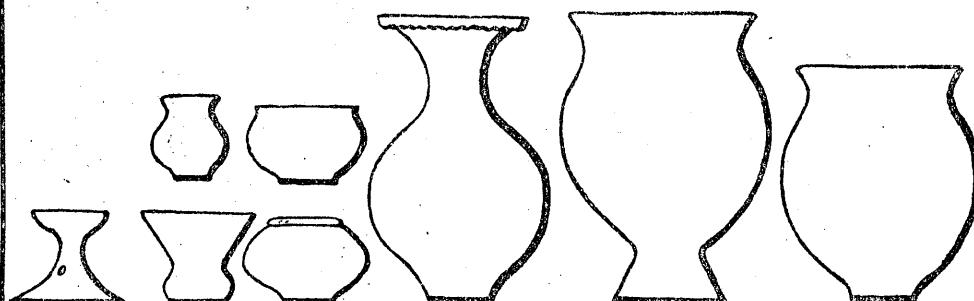
脚部有るもの

大形にして
(總高10釐以上)

頸部狹きもの

小形のもの
(總高10釐以下)

高杯型のもの



T
類

S
類

B
類

K
類

A (略號)
類

[表二 第]

A類土器

本土器は一般に高さ二十纏以上あり、日吉臺出土の彌生式土器中大形に屬し、頸部徑の比較的大きい廣口の壺であり、特にK類土器の如き脚部を底部に有さない、普通の平底の土器である。本類土器の比較的完形のものの寸法を表示すれば次の如くである。

A類土器

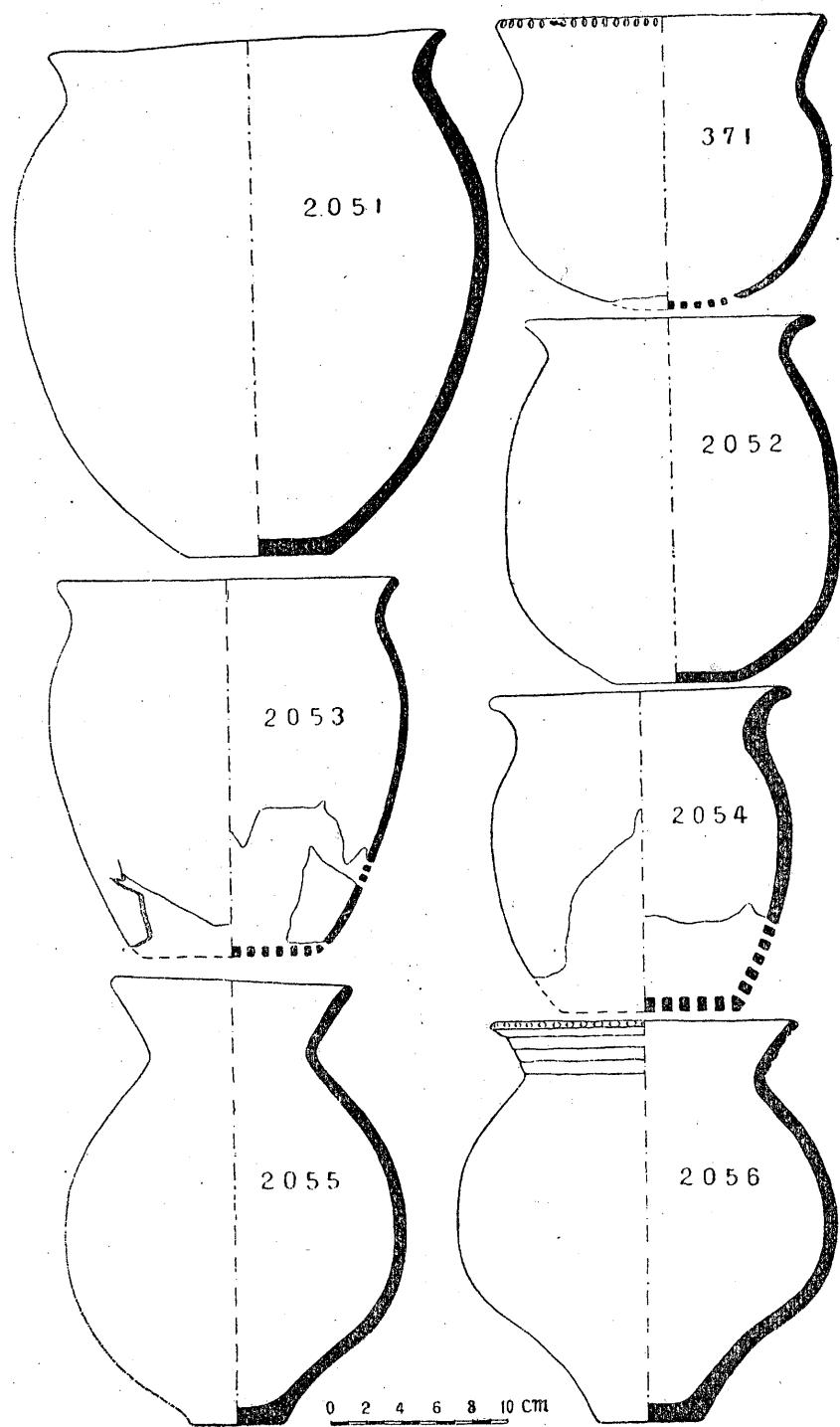
(単位纏)

整理番號	高 サ	口 径	頸部徑	胴部徑	底 径	備 考
二〇五一	二九・四	三三・六	二〇・六	二六・八	八・〇	無文
二〇五二	一一・四	一・六四	一三・六	一八・八	六・六	無文
二〇五三	一一・四	一九・四	一八・〇	二一・〇	一一・五	無文
二〇五四	一六・二 以上	一七・二	一五・〇	一七・〇	缺 損	無文 廣橋實氏本塾へ寄贈ス
二〇五五	二五・五	一三・九	九・四	一九・二	五・三	無文 ハアバアド大學へ寄贈ス
二〇五六	二二・六	一七・五	一三・八	二一・五	六・〇	口緣部ニ施文・口頸部輪積 文ハアバアド大學へ寄贈ス

A類土器は一般に無文であり、文様があつても口縁部や胴部に極く簡単な文様を施せるのみであり（附圖第九参照）、或は刷毛目文などのものである（附圖第八参照）。

尚、A類土器は日吉臺上に、最も普遍的に發見され、第一期・第二期兩發掘調査區域から出土して居る。

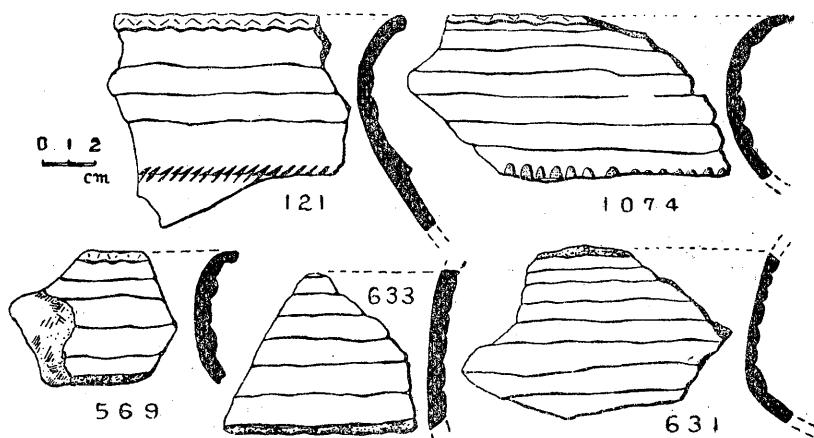
附圖第六 日吉臺出土彌生式A類土器



K類土器

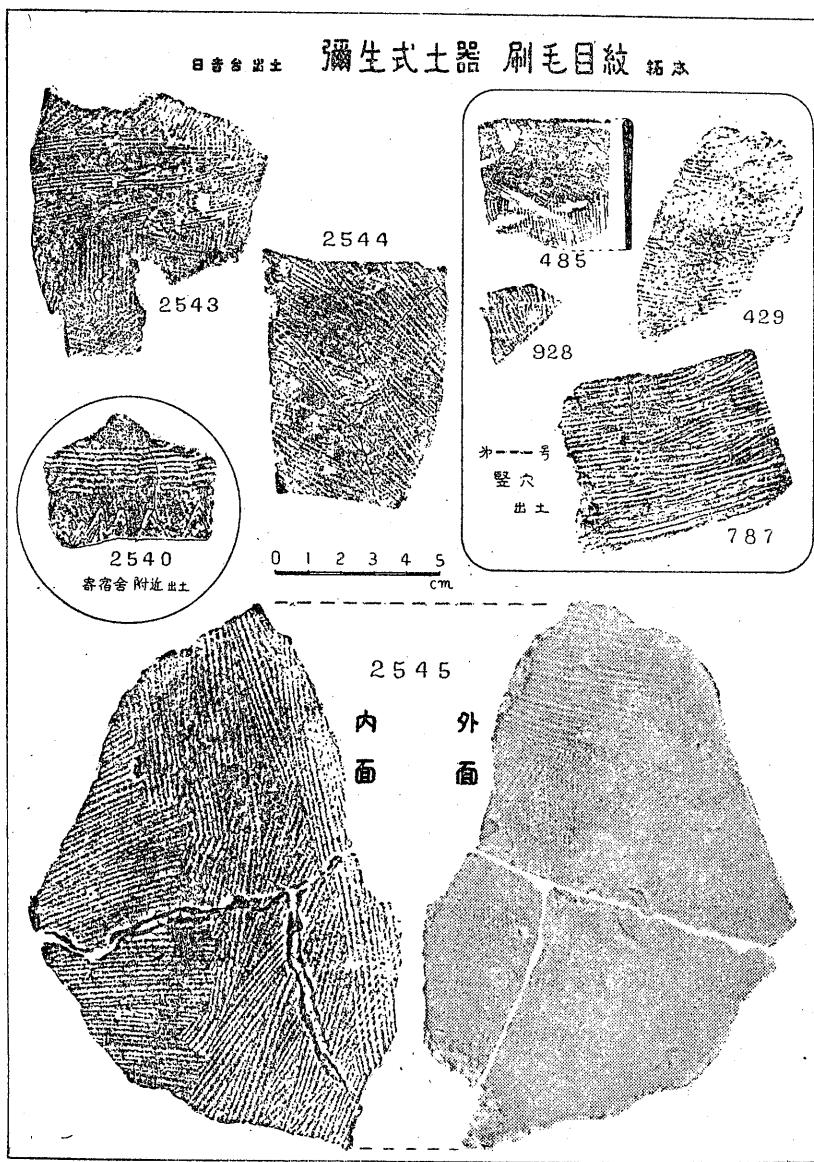
本土器は一般にA類土器の底部に下擴りの脚部（或は臺と云ふべきか）を附着せしめた、換言すれば朝顔の鉢を伏せて置いた上にA類土器を載せた様な獨特の形をなして居る。事實その製作に當つては最

附圖第七 土器製作ニ際シロ縁部ニ輪積法ヲ行ヒ裝飾的
效果ヲ齎セル例（寫眞第三 2056 土器参照）



121.....日吉臺第一〇三號堅穴出土
569・631・633・1074.....日吉臺第一一號堅穴出土

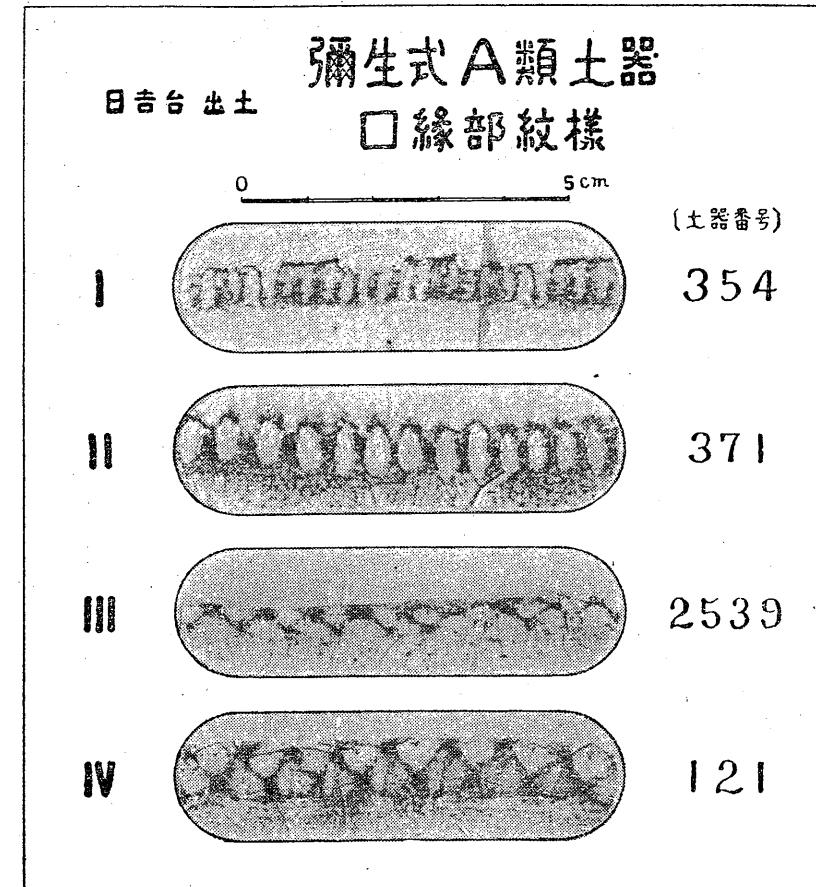
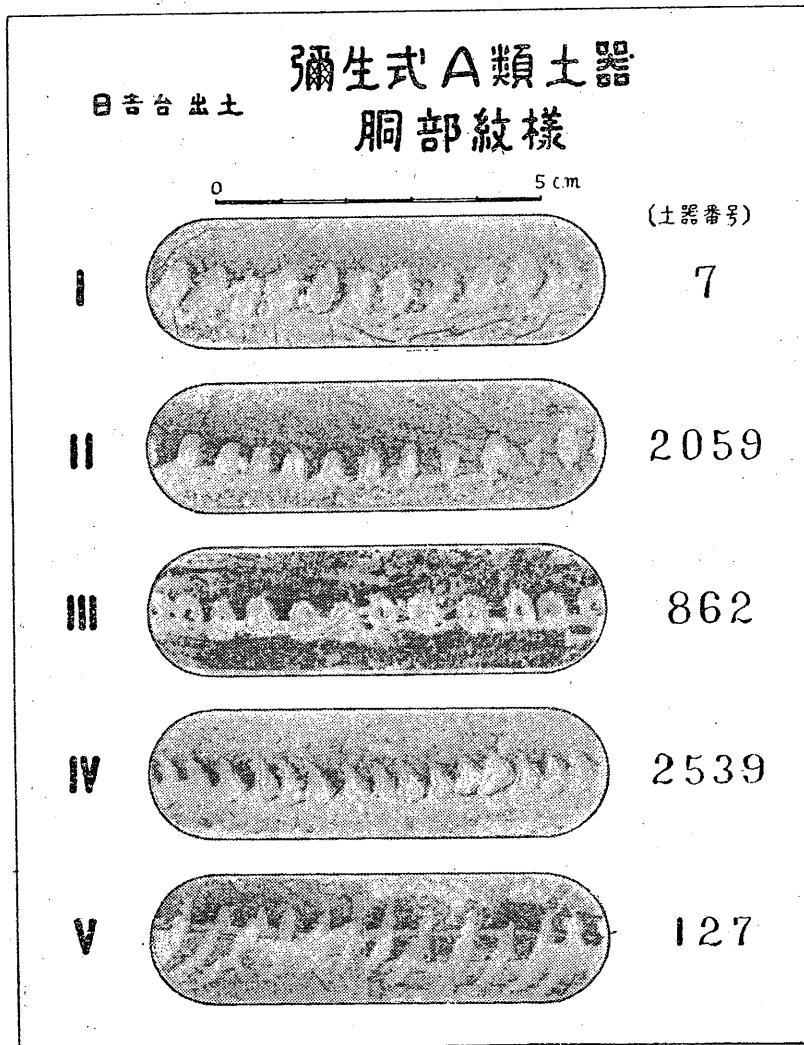
附圖第八



初A類形の土器を作つた後に、その底部へ脚部を作り添へるのであるから、必然的に其の接合部が脆弱であり破損し易く、日吉臺からは胴體から脱落して終つた脚部だけでも七十六個を發見して居る程であり、本土器の完全なものは僅に二個を發見したのみである。

本土器の中には、明かに、第六號及び第一〇四號堅穴の爐阤の中より出土して居るものあり、五德の

附圖第九



無い當時に於て、本類土器は甚だ便利な土器であつたと推察されるのである。而も本類土器は前記 A 類土器と同様可成り日吉臺上各處に出土し、日吉臺に於て兎も角も八十個近く發見されて居るのは興味ある事實である。尙、最も多く本土器を出土したのは第一一號堅穴であり二十六個を數へ其の次は第一〇四號堅穴の六個である。

次に K 類土器の寸法を表示する。(單位釐)

K 類土器(胴部を在するもの) 計四個

整理番號	總 高	口 径	頸部徑	胴部徑	脚部高	脚頸部徑	底 径	底 角	備 考
二三〇一	一七・二	一二・二	一〇・四	一二・六	四・二	四・六	七・四	七〇度	
二三〇二	二三・四	一六・四	一四・二	一七・〇	五・〇	五・〇	八・七	六八度	ハアバアド
二三〇三	二四・五 以上	一七・〇 以上	一七・〇	二二・六	缺 損	五・〇	缺 損	五一度	大學へ寄贈
二三〇四	一九・二 以上	一八・五	一六・九	二一・四	缺 損	六・八	缺 損	缺 損	

K 類 土 器

(胴部缺損するも脚部高の明かなもの) 計二十一個

整理番號	脚部高	脚頸部徑	底 徑	底 角	備 考
一八七	五・六	四・六	一〇・五	六〇度	第一〇四號堅穴出土
三七〇	五・二	六・八	一〇・〇	七〇度	第一〇四號堅穴出土

K 類 土 器

(脚頸部徑のみ明かなもの) 計二十八個

整理番號	脚頸部徑	備 考
三〇一	四・五	第一〇四號堅穴出土
三六四	五・五	第一〇四號堅穴出土

六五六	五·六	五·六	八·四	七二度	第一 堅穴 出土
六五八	六·〇	五·五	八·四	七二度	第一 堅穴 出土
六五九	五·六	五·六	一〇·〇	六五度	第一 堅穴 出土
一〇九七	六·四	六·三	一一〇	七二度	第一 堅穴 出土
二三一	七·〇	五·四	一一〇	七二度	第一 堅穴 出土
二三一二	七·二	四·六	一一〇	六二度	第一 堅穴 出土
二三一三	六·六	五·九	一〇·二	六七度	第一 堅穴 出土
二三一四	六·八	六·一	一〇·二	七二度	第一 堅穴 出土
二三一五	四·四	五·六	九·八	六四度	昭 工 事 中 出 土
二三一六	五·四	五·五	八·七	七〇度	昭 工 事 中 出 土
二三一七	七·五	四·七	八·〇	七二度	昭 工 事 中 出 土
二三一八	四·六	四·七	八·二	六四度	昭 工 事 中 出 土
二三一九	四·七	五·三	八·四	六四度	昭 工 事 中 出 土
二三一〇	六·〇	四·七	一一·二	七〇度	寄宿舍附近出土
二三一一	六·〇	六·四	一一·二		
二三一二	六·六	六·三	一二·〇	六四度	假昭 寄宿 舍出土
二三一三	一〇·六	六九度	一二·〇	六四度	假昭 寄宿 舍出土
六九度	昭 寄宿 舍附近 出土				

五八五	五·二	第一 堅穴 出土
六三七	五·〇	第一 堅穴 出土
六三四	五·〇	第一 堅穴 出土
六一二	五·五	第一 堅穴 出土
八七五	五·八	第一 堅穴 出土
九三九	五·〇	第一 堅穴 出土
一〇二三	五·〇	第一 堅穴 出土
一〇九一	五·七	第一 堅穴 出土
一〇九二	五·三	第一 堅穴 出土
一〇九四	五·八	第一 堅穴 出土
一〇九五	五·八	第一 堅穴 出土
一〇九六	六·二	第一 堅穴 出土
一〇九八	六·〇	第一 堅穴 出土
二三三一		
二三三二		
二三三三		
四·九	五·四	寄宿舍附近出土

二三二四	七・八	六・〇	一一・〇	六七度	
二三二五	六・四	七・七	一二・五	六七度	寄宿舍附近出土

以上K類土器は、殆ど胴部を缺損して居るが、何れも脚部には文様無く、又、胴部を在する四例も見ても、何れも無文であり恐らく本類土器は殆ど無文のものばかりの如く思はれる。け

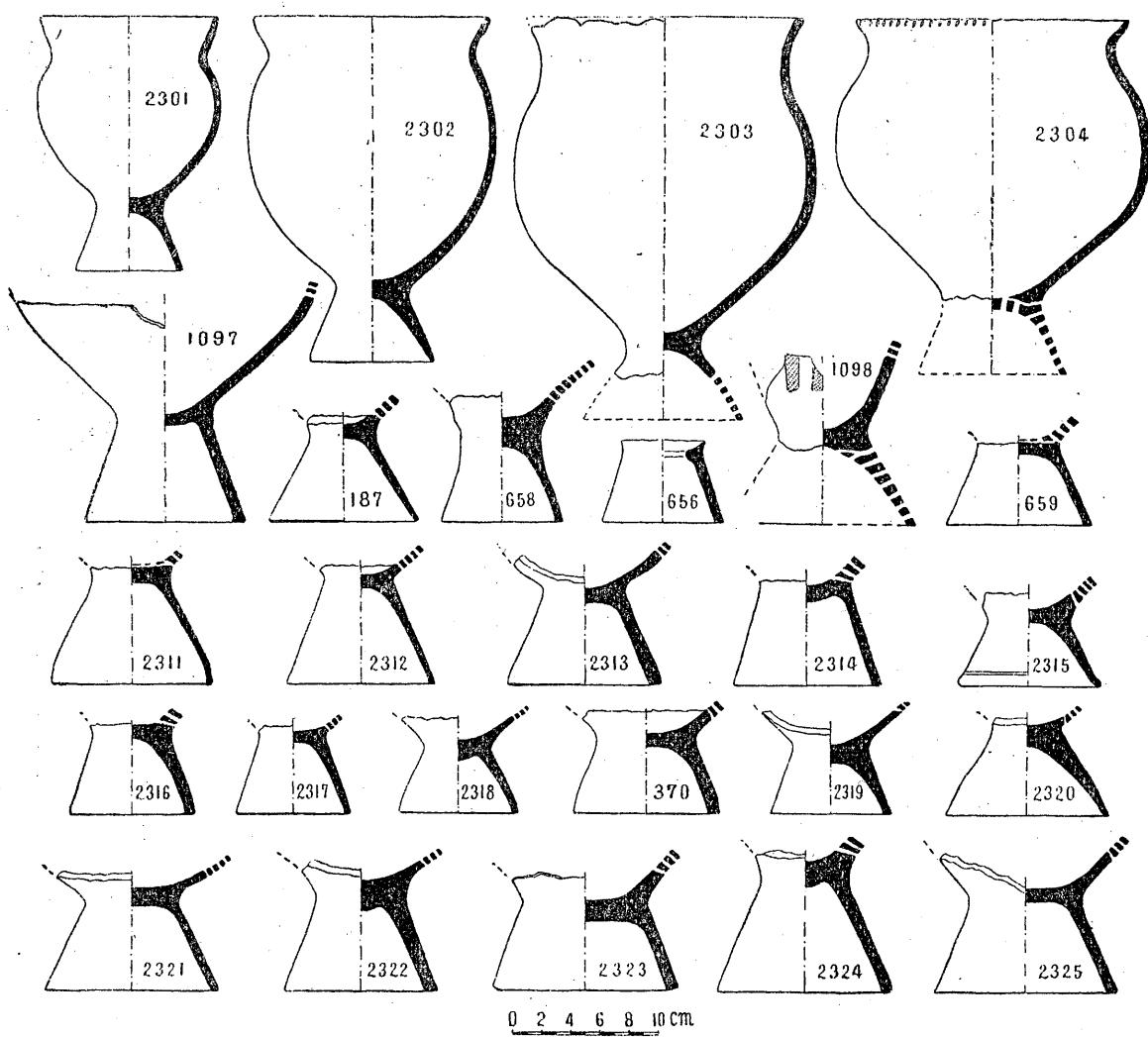
れども、一例第一一一號堅穴から出土せるものに、細い繩文と彩色を施せる胴部の一部を僅かばかり残存接續して居る脚部があり、K類土器は、無文ばかりとは云はれない(附圖第一〇土器1098参照)。

又、同じく第一一一號堅穴から出土せるものに、胴部と接續しない全く脚部だけ獨立して、臺として作られたと思はれる土器が一例ある事を附記して置く(附圖第一〇 656 土器参照)。

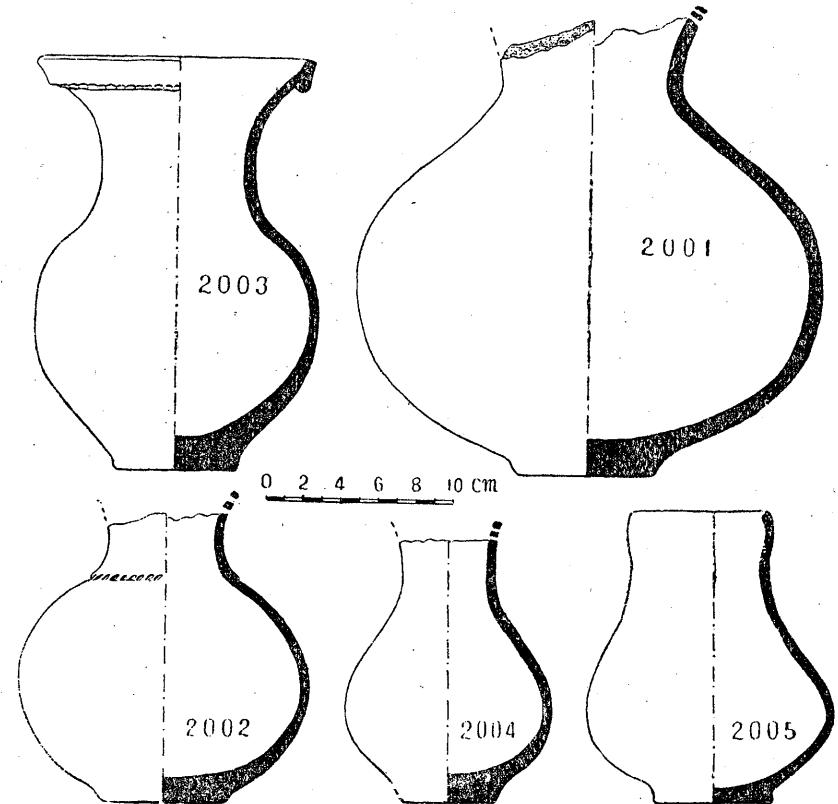
B類土器

本類の土器は、A類土器とは反対に頸部の狹まれる土器にして、一般に其の口縁部は朝顔の花の様に開いて居る。主なるA類土器の寸法を示せば次の如くである。

二三三五	六・二				
二三三六	四・三				
二三三七	五・〇				
二三三八	五・〇				
二三三九	六・〇				
二三四〇	五・六				
二三四一	四・五				
二三四二	六・二				
二三四三	五・七				



附圖第一〇(上)日吉臺出土彌生式K類土器

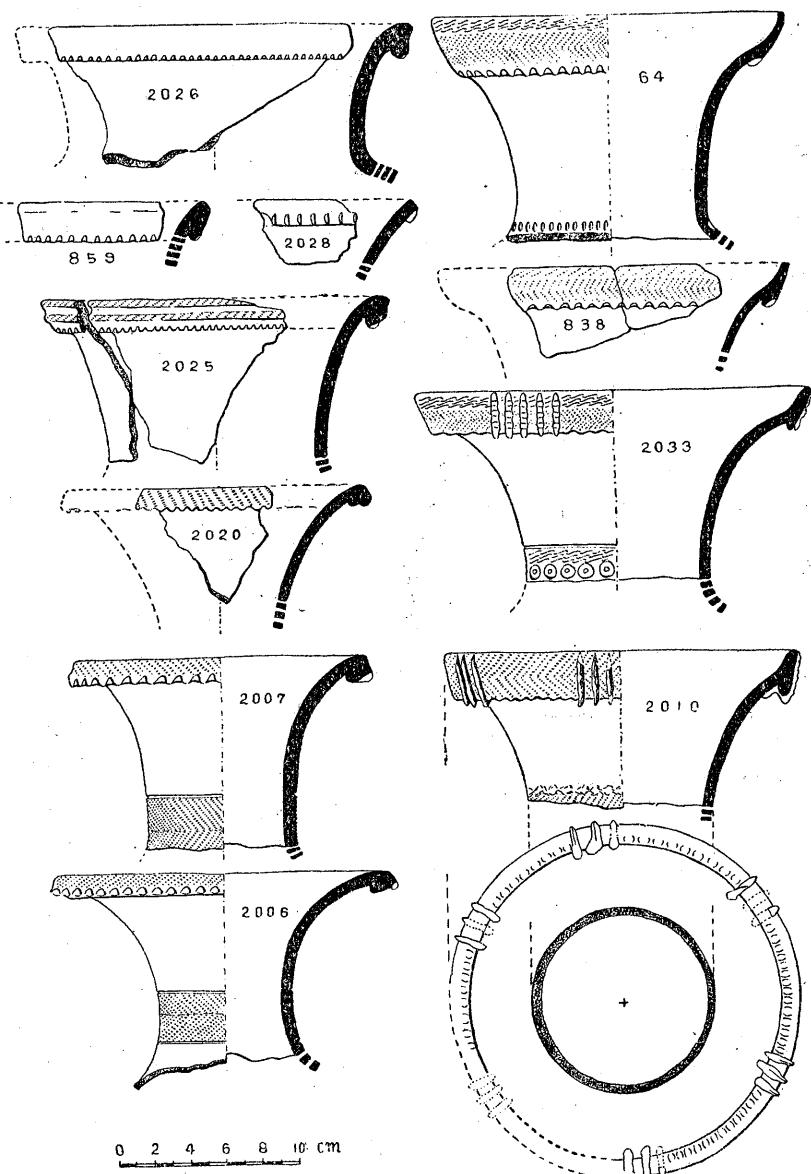


B 類 土 器（胴部を存するもの） 計五個（附圖第一一參照）

整理番號	高 サ	口 径	頸部徑	胴部徑	底 径	備 考
二〇〇一	二四・四 以上	缺 損	九・六	二四・八	七・二	假寄宿舍敷地出土
二〇〇二	一五・四 以上	缺 損	六・二	一五・六	六・八	胴部ニ施文アリ
二〇〇三	二二・〇	一四・四	八・二	一五・二	六・五	口緣部下側波狀文アリ
二〇〇四	一四・〇	缺 損	五・〇	一一・〇	五・〇	
二〇〇五	一五・六	七・六	七・三	一三・二	六・四	體育會附近出土刷毛目文

B 類 土 器（胴部缺損・口徑明かなもの） 計十八個

整理番號	口 径	備 考	整理番號	口 径	備 考	整理番號	口 径	備 考
六四	一九・二	堅第 一〇二 號	二〇一〇	一九・四		二〇二二	二〇・〇	
三二二	二〇・〇	堅第 一〇四 號	二〇一七	一〇・八		二〇二五	一八・五	
八三八	二〇・〇	堅第 一二一 號	二〇一八	一〇・〇	無文	二〇二九	二二・〇	
一〇九九	一三・〇	堅第 一二二 號	二〇一九	一六・〇		二〇三一	二三・〇	
二〇〇六	一九・二	堅第 一二一 號	二〇二〇	一七・〇		二〇三三	二三・〇	口緣部内側 ニモ施文
二〇〇七	一六・六	頸 二 部 徑						
			二〇一一	一七・〇				

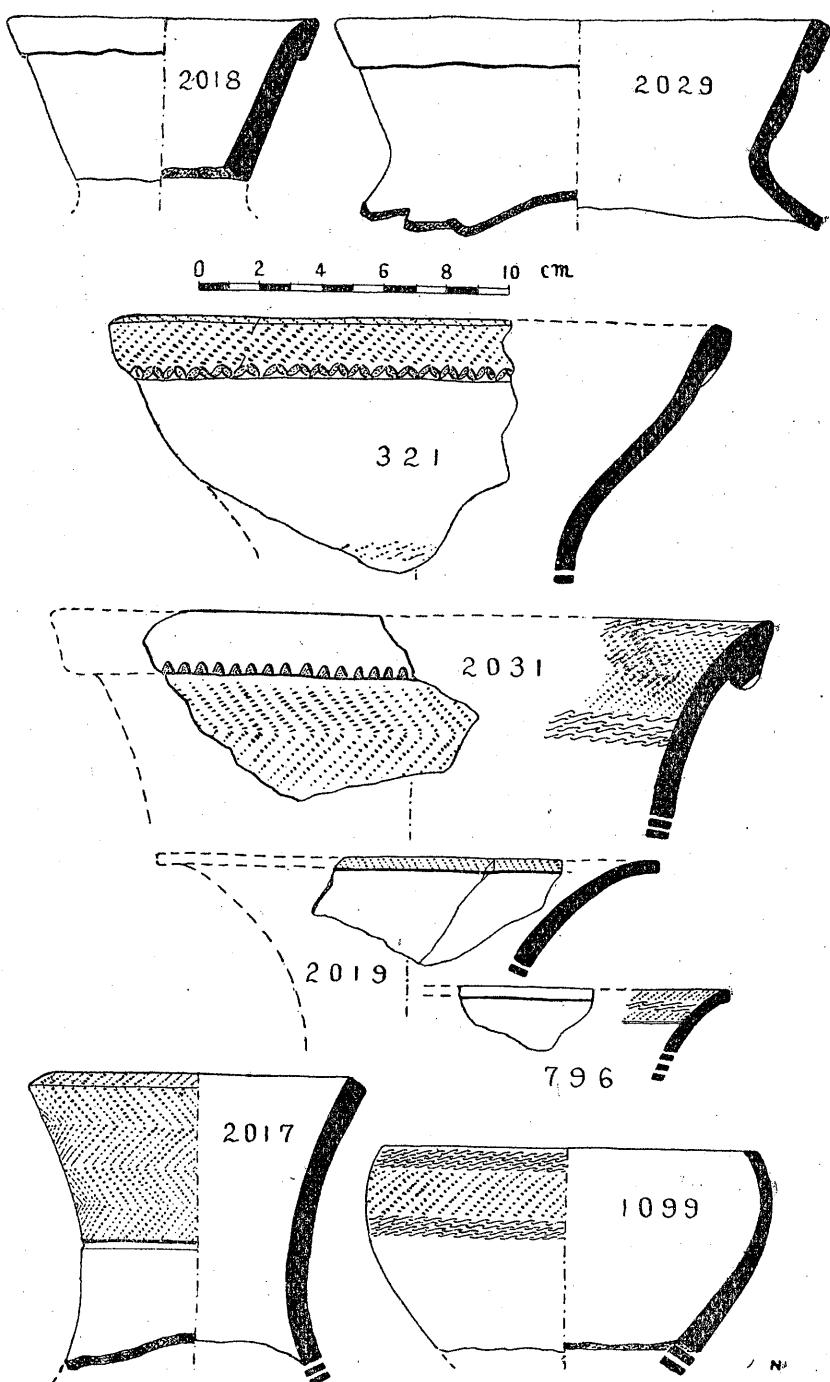
附圖第一二 日吉臺出土
彌生式B類土器口緣部

B類土器の最も著しい傾向は、口縁部に裝飾文様を施せるものの多い事である。而も、其の文様の主體は、本土器が繩文式土器ではあるが、細い繩目文であり、細い棒に細い繩を巻きつけたものを土器面に迴轉し押捺したものである。

一般に彌生式土器の文様は繩文式土器とは異り、器

形の端正なるに調和してすこぶる淡白である。而して日吉臺出土の彌生式土器も其の範疇に屬して居るのであるが、このB類土器の中には誠に異彩を放つた作品が見られる。羽状繩文を施せるのみならず、口縁部を三等分乃至六等分せる位置に三條乃至五條の隆起文を各々装着したり、口縁部に隆起連珠文をつけたもの等、優秀なるものがある。かつて森本六爾氏が、「考古學」第五卷第一號誌上に「彌生式に於

附圖第一三 日吉臺出土
彌生式B類土器口緣部



ける二者」と題し、東京市大森區久ヶ原や九州遠賀川方面等の彌生式土器に例を引いて、飾られぬ土器と飾られた土器の存在に就いて述べられた事があるが、日吉臺の本類土器こそは後者の白眉と見做されやう。本類土器に於ける繩文利用に就ては、日吉臺の地理的位置と當時の環境を考へ、繩文式文化と彌

附圖第一四

東學

彌生式土器口緣部上面繩紋(拓本)

日吉台出土

322 犬一〇四号竪穴出土

外徑 20.0 cm

6 mm

838 犬一一一號竪穴出土

外徑 20.0 cm

3.5 mm

64 犬一〇二號竪穴出土

外徑 19.2 cm

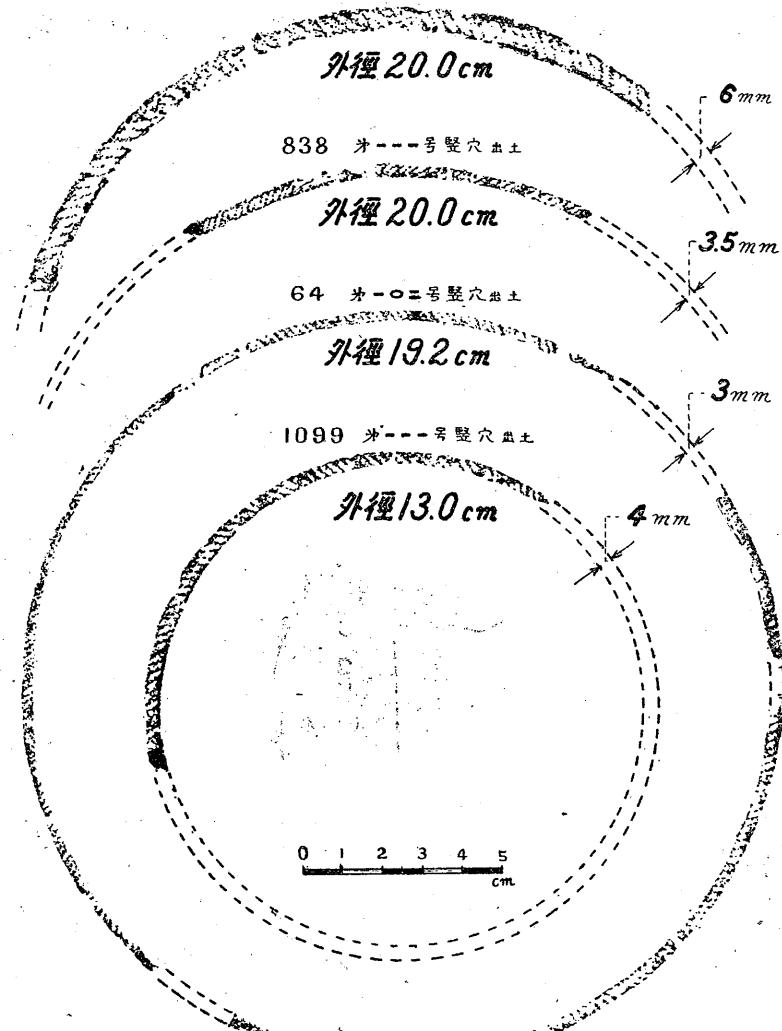
3 mm

1099 犬一一二號竪穴出土

外徑 13.0 cm

4 mm

0 1 2 3 4 5
cm



第十八編 第四號 (K20) 111八

附圖第一五

彌生式土器口緣部側面繩紋(拓本)

日吉台出土

504

1093

1099

322



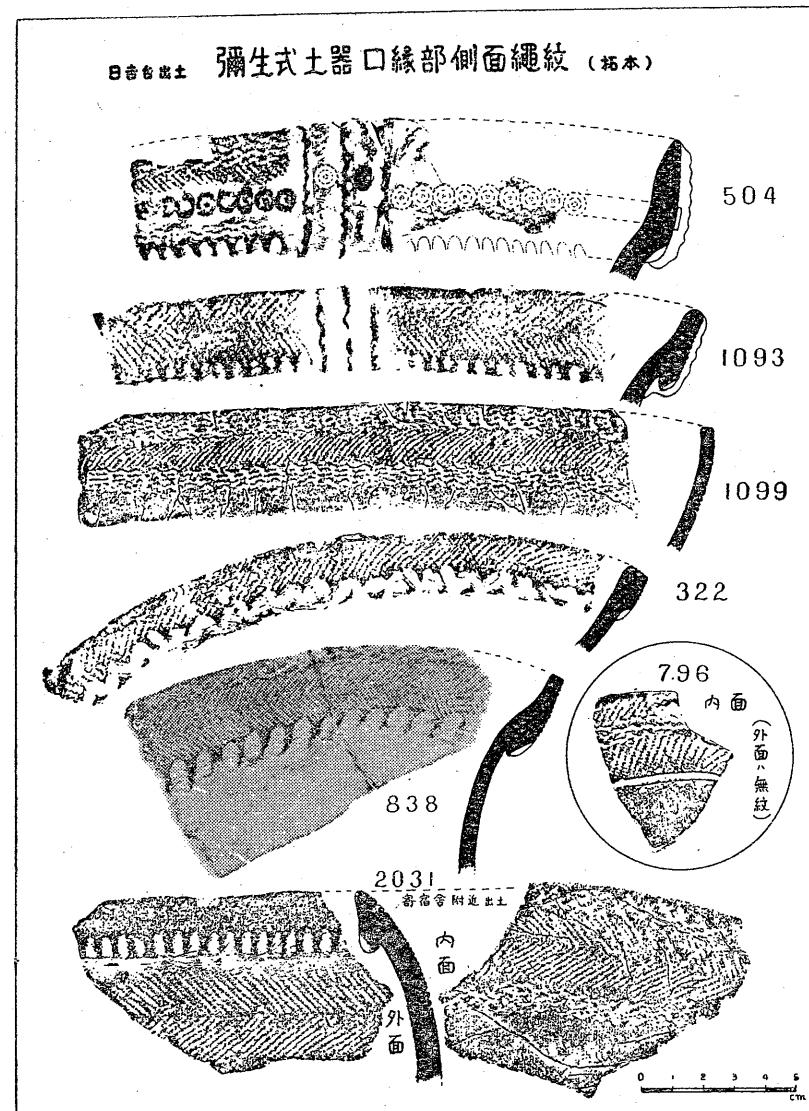
838

2031
新宿谷附近出土

外面

内面

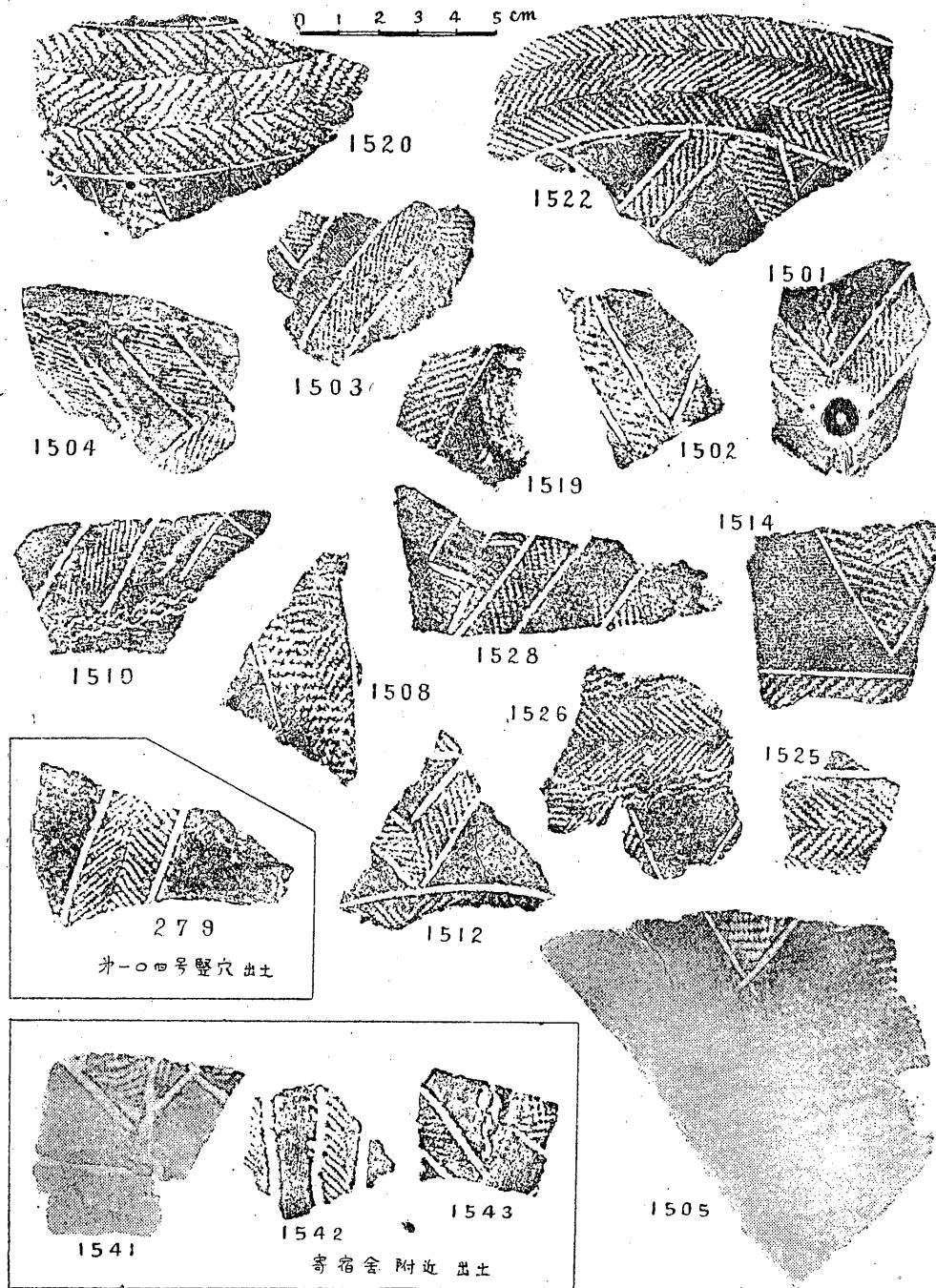
0 1 2 3 4 5
cm



生式文化の接觸を物語るものと云へるかも知れないが、彼我の土器面に見る繩文利用の趣きは誠に異つて居り、一般に前者が素朴な感じであるのに對し、後者は著しく纖細であり精練されて居る。

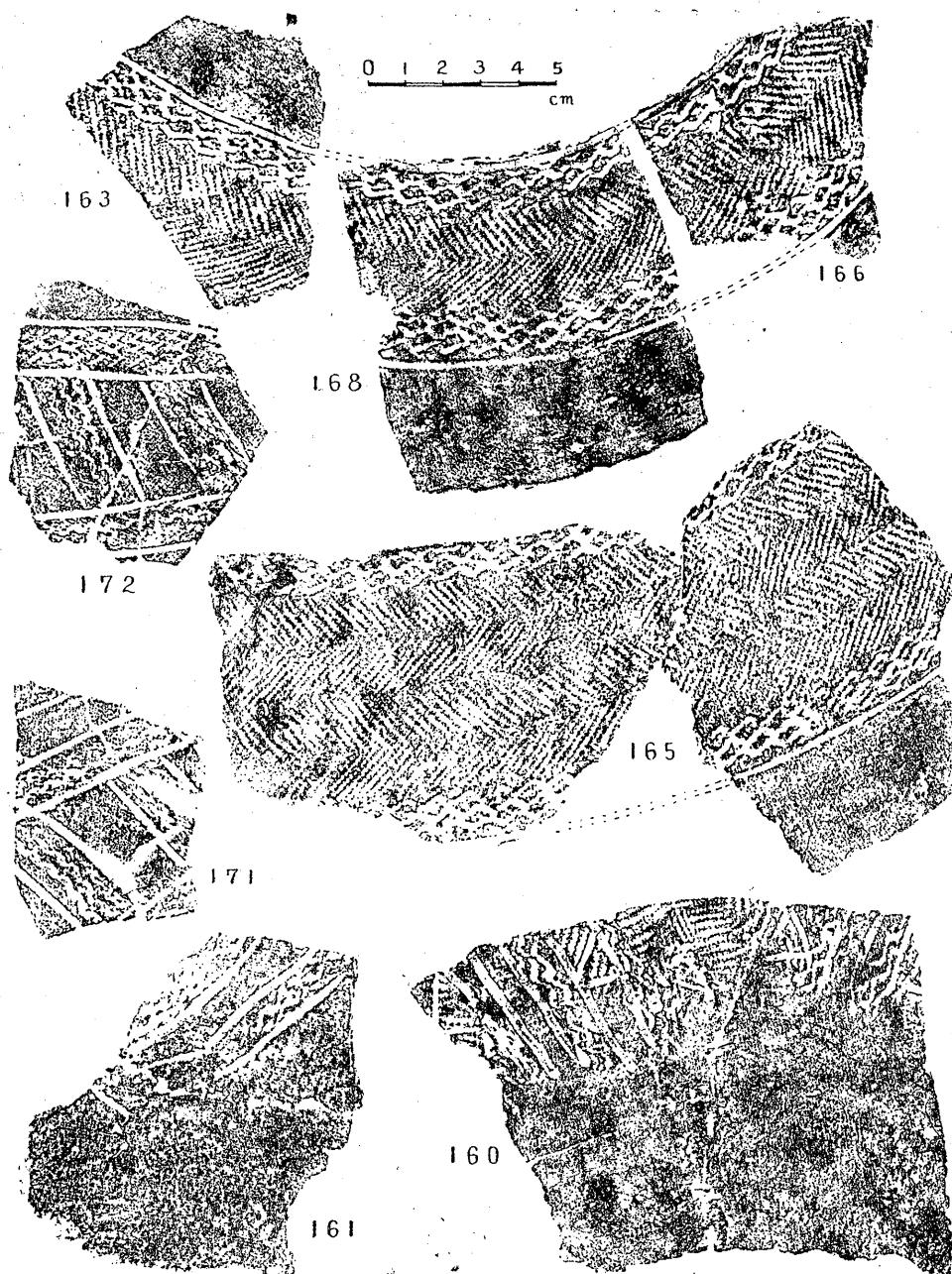
附圖第一六 日吉臺出土彌生式土器拓本

日吉臺彌生式竪穴發掘報告（西岡）



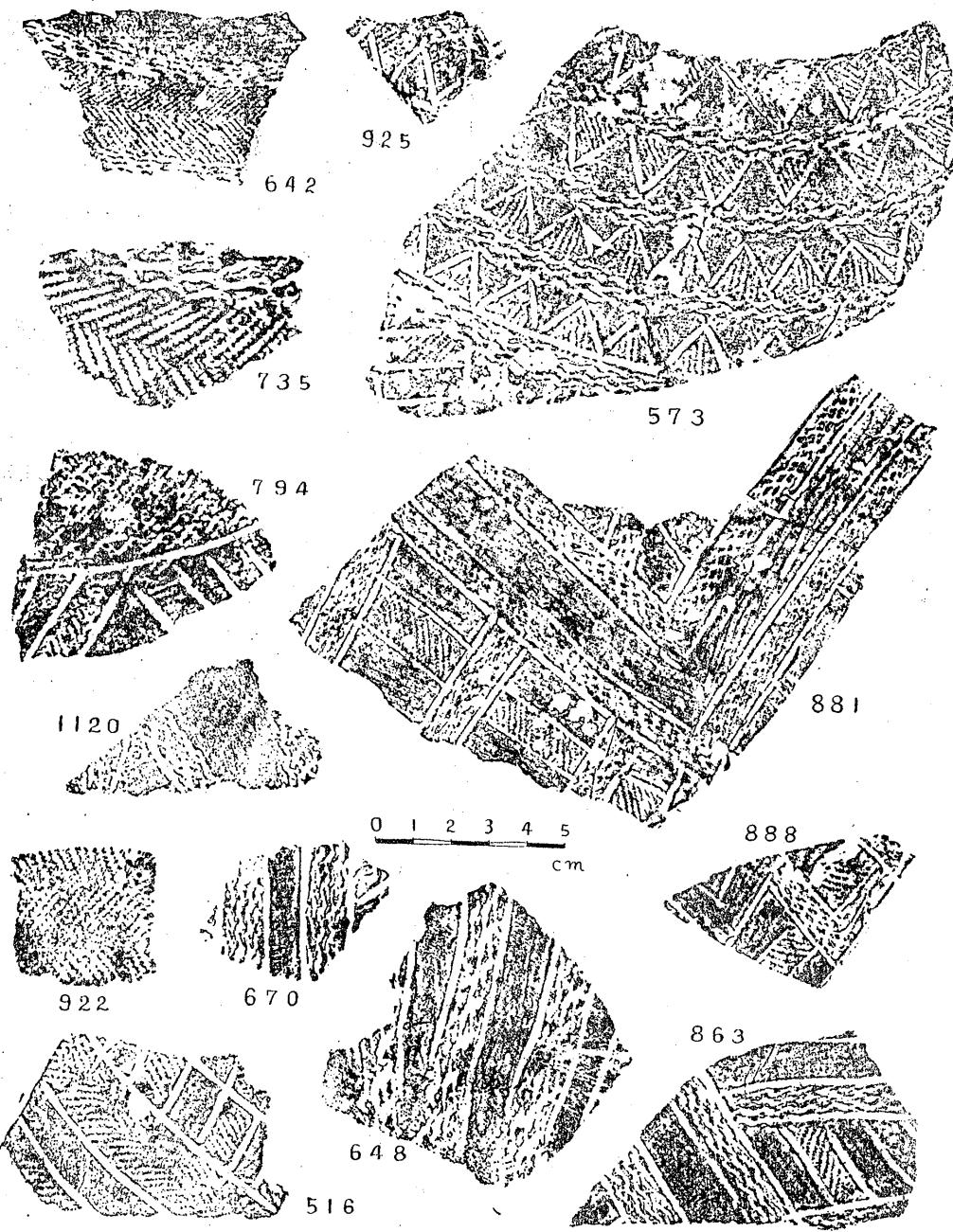
更に又、日吉臺の繩文利用の彌生式土器中には、繩文の間に巧に赤色の彩色を施せる優秀なる作品が存する事を特記せねばならない。赤く彩色された彌生式土器は、概して愛知縣其の他關東方面の東日本

附圖第一七 日吉臺出土彌生式土器拓本



に多く分布し、敢て日吉臺に限つたものでは無いが、日吉臺出土の其等の中には、他に類例を未だ見ない獨特の文様が存して居る（附圖第一八 573 土器参照）。尙、是等日吉臺に於ける彩色土器は、不幸にして完

附圖第一八 日吉臺出土彌生式土器拓本



形土器が發見されないが、破片から推定して其等の器形は多くB類土器系と思はれるが、中には前記の如く、脚部を裝着せるK類土器にも一例、彩色された破片が見られる。

日吉臺の彩色土器に就いては、昭和十一年十一月三日、中國新聞紙上に、上田三平氏談として「石器時代人の藝術・驚くべき彩色土器發見・日吉臺大倉山その他から・褪紅朱紅の配色鮮やか」と題する記事

S類土器

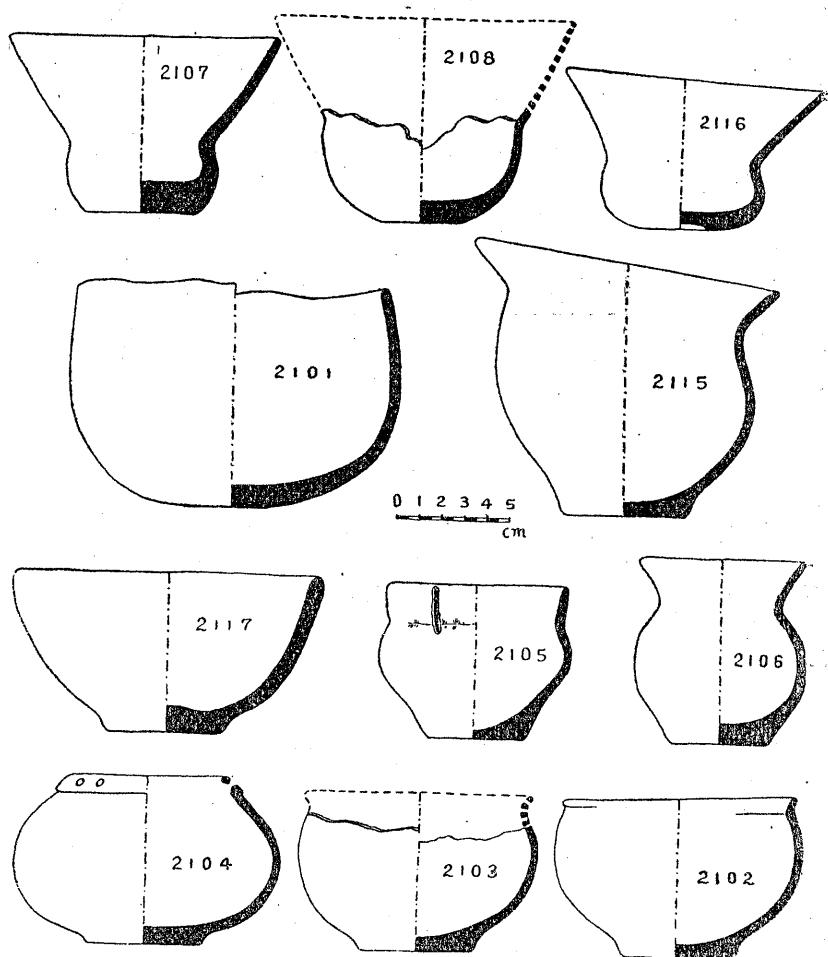
整理番號	高 サ	口 徑	胴 徑	底 徑	備	考
二一〇一	九・八	一三・五	一四・四	(丸底)	體育會附近出土	
二一〇二	七・〇	一〇・二	一〇・四	四・九		
二一〇三	不明	缺 損	一〇・四	五・〇		
二一〇四	七・五	六・七	一一・八	五・一	體育會附近出土 口緣部ニ小孔アリ	
二一〇五	六・八	八・一	八・五	四・二	底部ニ葉痕アリ 第三號堅穴ハ出土	
二一〇六	七・七	七・三	七・四	四・六	假寄宿舍附近出土 頸部徑五・三	
二一〇七	七・八	一一・九	六・六	五・〇	底部ニ葉痕アリ 第一〇號堅穴出土	
二一〇八	不明	缺 損	八・六	三・〇		
二一〇九	一一・〇	一三・六	一一・四	四・五	ハアバアド大學へ寄贈 第三號堅穴出土	
二一一〇	六・六	一〇・三	七・〇	(丸底)	ハアバアド大學へ寄贈	
二一一一	七・〇	一三・七			ハアバアド大學へ寄贈	
五・二						

月、史前學雜誌第九卷第六號誌上に桑山龍進氏「赤色彩紋の土器」と題し、氏が早くも昭和六年十月十八日に、日吉臺に彩色土器の一
片を發見された事を報せられて居る。

S類土器

本類の土器は何れも總高十釐以下の小形土器であり、その器形に鉢形・碗形・小壺形等色々あり、

日吉臺出土
彌生式S類土器



定して居らない。その主なるものの寸法は右表の如くである。

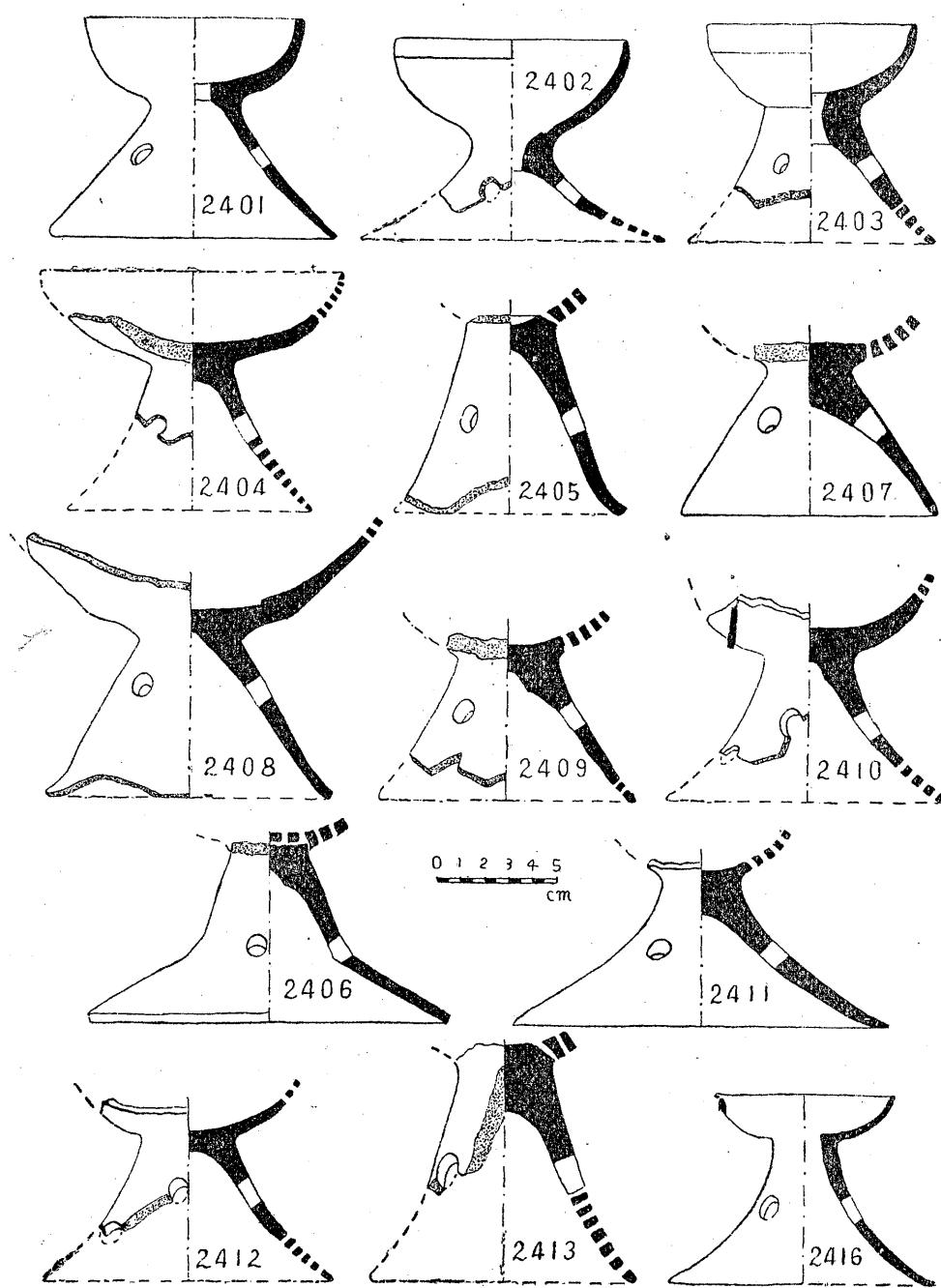
是等S類土器は殆ど無文であるが、僅かに一例口縁部に隆起文のあるを見る。

(2105 土器) 又、他の一例は口縁部の相対する位置に各々二個の小孔を穿ち、紐を通して縣垂したものと想像される (2104土器)。尙、本類土器は第二期發掘の堅穴から一例も發見されず大體第一期發掘調査に發見せられた事を注意して置く。

T類土器

本類の土器は、一般に古墳から出土する所謂高坏の祖形と云はれて居る如く、彎曲した裾擴がりの脚部を有して居る。それはK類土器の脚部とは全く趣きを異にし、その厚さも薄く、且つ直徑一粋内外の孔が無文の脚の側面に穿たれ、其の孔の數は三個をもつて最も普通とするが、中に二個乃至四個、或は六個を數ふるものもある。又、脚部の側面のみならず、土器の底部に穿つたものも存し、本土器が單な

附圖第二〇 日吉臺出土彌生式T類土器

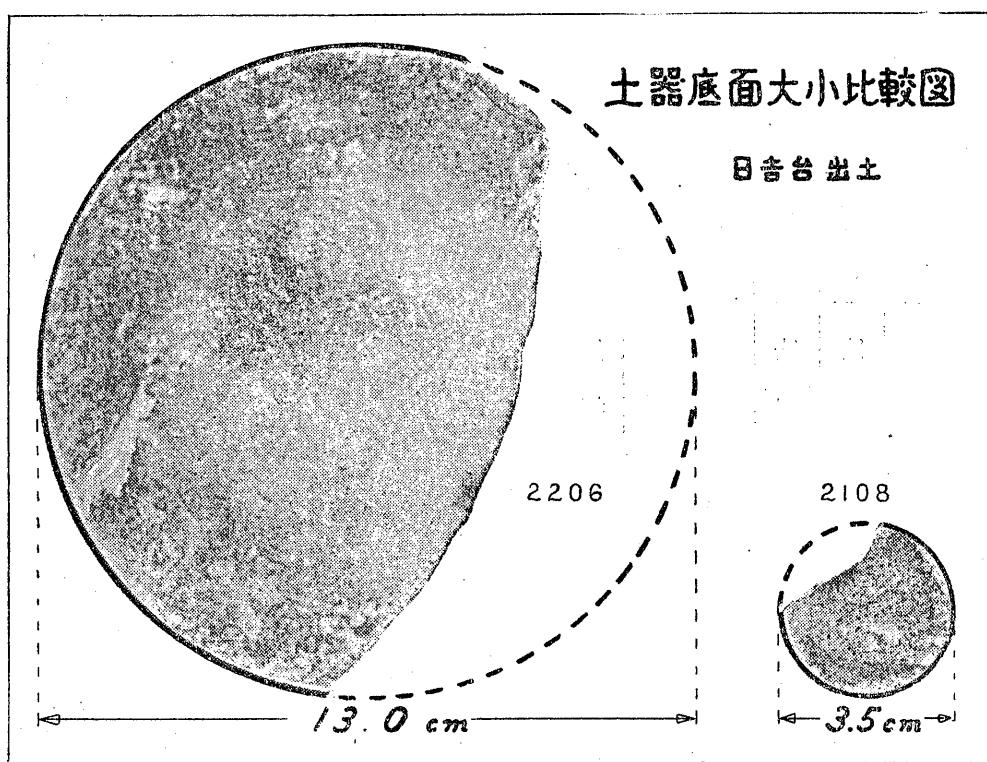


る液體を入れる容器ばかりではない事を物語つて居る。不安定な土器を掘置く臺として便利なものである。次にその寸法等を表示する。尙、本類土器について第二期發掘に於ては第一〇二號堅穴に僅に一例、

整理番號	全高	口徑	腳部高	腳頸部徑	底徑	腳部孔數	中央孔	備考
二四〇一	九・四	九・三	五・六	三・九	一二・三			
二四〇二	缺損	缺損	缺損	缺損	缺損			
二四〇三	缺損	缺損	缺損	缺損	缺損			
二四〇四	缺損	缺損	缺損	缺損	缺損			
二四〇五	缺損	缺損	缺損	缺損	缺損			
二四〇六	缺損	缺損	缺損	缺損	缺損			
二四〇七	缺損	缺損	缺損	缺損	缺損			
二四〇八	缺損	缺損	缺損	缺損	缺損			
二四〇九	缺損	缺損	缺損	缺損	缺損			
二四一〇	缺損	缺損	缺損	缺損	缺損			
二四一一	缺損	缺損	缺損	缺損	缺損			
二四一二	缺損	缺損	缺損	缺損	缺損			
二四一三	缺損	缺損	缺損	缺損	缺損			
二四一四	缺損	缺損	缺損	缺損	缺損			
二四一五	缺損	缺損	缺損	缺損	缺損			
二四一六	缺損	缺損	缺損	缺損	缺損			
八・〇	七・七	六・〇	六・六	六・〇	七・二	八・〇	九・〇	一〇・一
六・〇	六・二	六・二	六・六	六・六	六・〇	七・二	八・〇	九・〇
二・八	四・六	四・〇	四・〇	三・四	三・八	四・三	四・二	三・九
一一・五	缺損	缺損	缺損	一六・〇	缺損	缺損	缺損	缺損
3	?	?	3	6	3	3	4	2
有	無	有	無	無	無	無	無	有
	ハアベアド大學へ寄贈							

七〇 一二・八 一三・五 五六 三・〇

七〇 〇 無



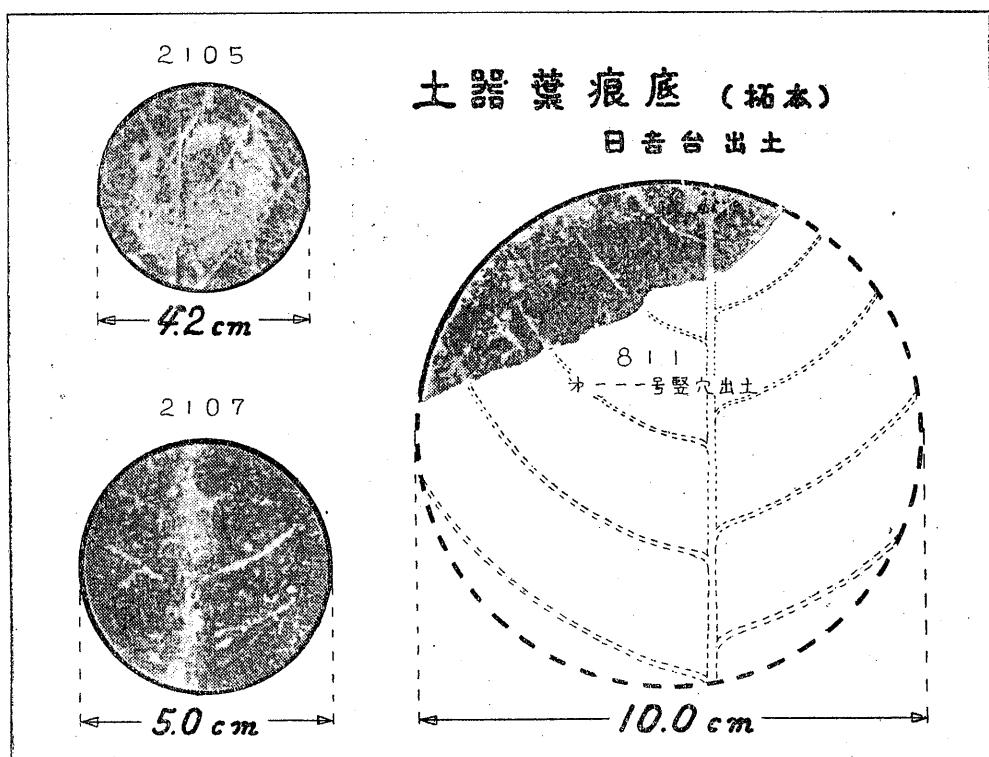
それも本類土器としては異例と見做すべきものが出土しただけであり、其の他の大體第一期發掘調査地域に限られて發見されて居るが、遺憾ながら其の多くは出土遺跡を未だ明確に知り得ない。

(土器底部に就いて)

日吉臺出土の彌生式土器には、前述の如く土器底に脚部を有するK類土器やT類土器も存するが、他の土器は殆ど多く平底であり、不安定な丸底のものは、小形のS類土器に二例あるのみである。平底の大きさは大小色々あり、最大なるものは直徑一三糰、最小なるものは直徑三糰を示して居る(附圖第二一参照)。

尙、平底は殆ど全て無文であるが、三例だけ木の葉の壓痕を有するものが發見されて居る。これは勿論裝

第二圖 附



飾的意圖を有するのではなく、土器製作に際して木の葉を敷いた場合もあつた爲の、當然の歸結と見るが至當であらう（附圖第二二參照）。

第二節 石 器

日吉臺の彌生式遺跡に於ては、前節に明かなる如く優秀なる土器を多量に出土して居るの反し、石器に關しては誠に貧弱である。日吉臺より南方の臺地に於ける大倉山精神文化研究所敷地内の彌生式遺跡からは、その土器と共に優秀なる磨製石斧を出土して居るにも拘らず、日吉臺からは、自然石を幾らか加工した程度のもの、或は粗末な打製石斧など合計十二個が發見されて居るに過ぎない（次表參照）。最大の規模を有する第一一號堅穴の主柱穴の一つから出土した石器の如きも、自然石に近い誠に粗末なものであり、石斧と見做すべきやも疑はしい程度のものである。斯かる事實は、日吉臺に大聚落を形成せる彌生式先史人の主要農耕具或は利器が、如何なる材料で作られて居た

(單位釐)

かを吾人に考へしめる。吾人の發見し得た石器類は余りに貧弱であり、さりとて吾人が偶然彼等の優秀な石器を未だ發見し得ないのだと簡単に回避も出來ないであらう。

尙、石器とは云へないが、自然石の碎片が第一號、第四號・第一〇三號・第一〇四號等の堅穴から出土し、特に第四號からは黒曜石片が一個發見されて居る。

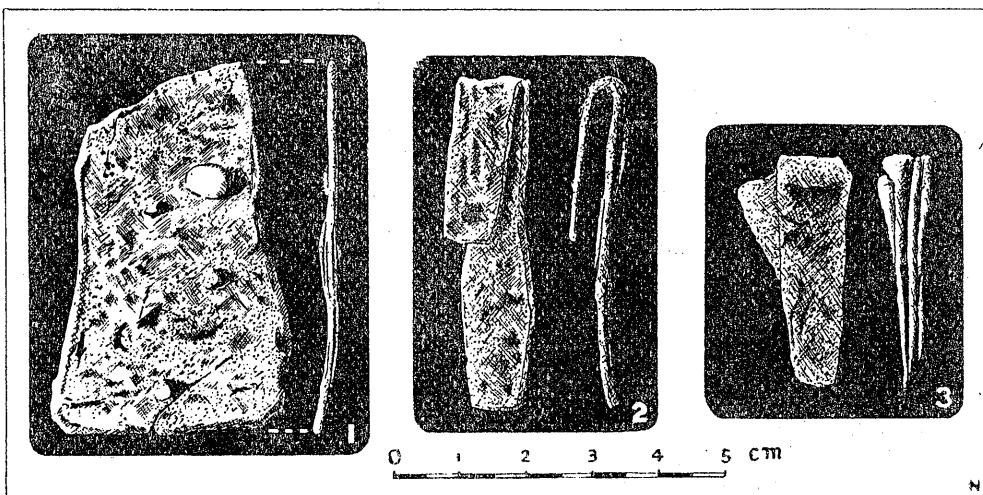
又、第一〇三號堅穴の一偶に出土せる土器の中には、河原より拾ひ集めて來たらしい色々の綺麗な基石大の小砂利を數個藏して居た。これは彌生式先史人の生活感情を想像する上に、甚だ興味ある事實と云へるであらう。

第三節 其の他

日吉臺の彌生式堅穴からは、土器や石器以外に、鐵片・貝殻・木炭等を出土して居る。

整理番號	長さ	幅	厚さ	備考
一	九・〇	七・八	一・五	第一號堅穴出土
二	七・三	四・一	二・〇	第二號堅穴出土
三	一三・〇	六・五	三・二	第二號堅穴出土
四	一一・二	四・二	二・〇	第四號堅穴出土
五	一四・六	六・六	二・〇	第四號堅穴出土
六	一二・〇	五・四	三・〇	第四號堅穴附近出土
七	九・五	四・五	一・六	體育會附近出土
八	九・四	四・四	二・五	
九	一〇・八	六・二	四・二	廣橋實氏本塾へ寄贈
一〇	一二・〇	五・四	一・六	ハアバード大學へ寄贈
一一	一三・〇	四・三	二・四	ハアバード大學へ寄贈
一二	一七・四	七・五	二・六	第一一二號堅穴出土

附圖第二三 鐵片 日吉臺第二號堅穴出土



鐵片は第二號堅穴の床上近くに三片を出土して居り、これを後世の混入物として片付けて終ふべきや否や、筆者は前記の如く日吉臺に石器の頗る貧弱僅少なる事實と考へ合せ、今後の興味ある課題としたい（附圖第二三参照）。

貝殻は第四號堅穴内に數個集合して發見されたのであり、これは彌生式先史人の副食物としての殘滓か、或は又別個の意義を有するのか筆者は詳にしない。唯、東京市大森區久ヶ原の彌生式堅穴の一つにも、爐邊に貝殻の堆積があつた事を附記して置く。

又、堅穴内には既に述べた如く爐址を發見して居るが、第一號、第二號、第七號、第一〇一號、第一〇二號等の堅穴には燒土の中に木炭を残し、中に竹の焼けたものも見受けられた。

結 言

日吉臺の彌生式堅穴住居址及び出土遺物などを總括して觀るに、要するに日吉臺は關東地方に於ける有數の彌生式大聚落であつた事が窺はれるのである。而も其處に發見された堅穴遺構の一様ならざる事、或は又、各種の彌生式土器類を出土して居る事實などは、日吉臺に於

ける彌生式文化の華かさを充分に思はしめる。特に其の土器類に於ては、既に述べ來つた如く器形に依つてのA・K・B・S・T五種類の土器が認められる。而して此の中B類土器は完形の發見は稀であるが、其の發見された碎片の中には繩文の利用が著しく又彩色を施したもの等あり、甚だしく所謂繩文土器への接觸影響を思はせる。又、日吉臺の小形のS類土器はA・K・T類土器等を伴ふが、大體第一期發掘調査地域に限られて發見されて居る。そしてT類土器は、其の形狀、古墳時代の所謂高杯との聯關係を物語つて居る。斯うしたB・S・Tの土器群或は段階的様相の中に於て、A類及びK類土器は最も地域的に普遍的な或は右土器群に對して共通的な存在を示して居る。詳細なる研究は更に今後の調査に俟たねばならないが、ともかくも日吉臺の彌生式遺跡は其れが全體的に見て彌生式分化様相にあるとしても、決して單一單純なるものでは無い。丁度繩文式文化と云つても其の中に數多の異つた文化樣相或は時に文化段階を認めねばならないが、これと同様な現象を、是處日吉臺の彌生式文化にも指摘し得る様に思はれる。特に此の場合、第一〇二號及び第一〇三號堅穴よりはA・B兩類の土器を出土し、第一〇四號はK・Bを、そして完全發掘を行へた第一一號堅穴からはA・K・Bの三種の土器を出土して居るが、第一期發掘の第三・第六・第一〇號堅穴などより出土せるS類土器や、同じく第一期發掘區域附近より出土せるT類土器等を、右の第二期發掘の堅穴群からは破片一片すらも發見し得なかつた事は大いに注目されるべきであらう。

そして日吉臺の彌生式先史人は、繩文式文化人に見る如き狩獵漁撈を中心とする生活の域を脱し、その主たる生業が農耕にあつた事は論を俟つまでもない。即ち彼等の主要食料は植物質であり、從つて日吉臺上に、繩文式文化の遺跡に多い貝殻や獸骨類の如き動物質食料の殘滓を堆積する所謂貝塚の如きを見るのは當然である。

ともかくも彼等は、當時多摩川や矢上川・鶴見川などの河口附近が既に海灣の時代を経て次第に冲積層低地に化しつゝある、農耕にとつて誠に都合良き環境の中に其の生活を展開したのである。これは同時に日吉臺の彌生式文化の時代を或る程度まで判定せしめる。殊に日吉臺が多摩川臺地の殆ど末端に位置する事實は、彼等農耕文化の展開が決して早期であつたとは見做されない。そして農耕生活は必然的に其の土地への定着性を齎し、その結果は次第に彼等の大規模なる堅穴住居址の建設となり、關東地方に於ける屈指の大聚落へと發展して行つたのである。更に又或る時期に於ける其の餘裕ある生活は、實用一點張りの土器を脱して、趣味の加つた而も精練された裝飾的土器の製作をも可能ならしめたのである。

日吉臺上の堅穴遺跡は勿論のこと一片の土器片にも、吾人は彼等先史人の生活の片影を知り、過去の日吉の姿を想ふ事が出來よう。彼等彌生式文化人こそ、實に豊葦原瑞穂國開幕の先端を切つて居たのである。(昭和十四年十二月九日稿)

寫眞第一 日吉臺第一一號彌生式堅穴
最大徑九米四〇 面積十七坪強（堅穴東北より撮影）



寫眞第二 日吉臺出土彌生式 A類土器



2052

高サ 20.4 瓢
口径 16.4 瓢

2055

高サ 25.5 瓢
口径 13.9 瓢

2056

高サ 22.6 瓢
口径 17.5 瓢

371

高サ 17.0 瓢
口径 18.8 瓢

(ハアバード大學へ寄贈ス)

寫眞第三 日吉臺出土彌生式K類土器



2301

高サ 17.2 糜

口径 12.2 糜

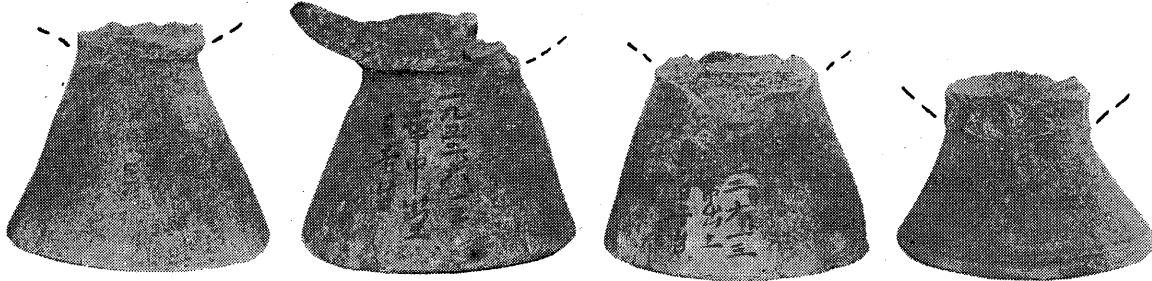


2302

高サ 23.4 糜

口径 16.4 糜

(ハアバアド大學へ寄贈ス)



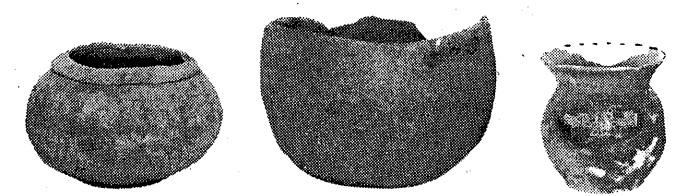
2312

2313

2314

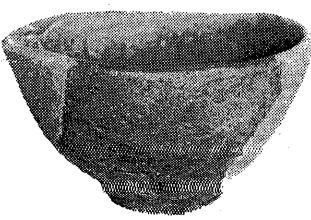
2315

寫眞第五 日吉臺出土彌生式S類土器



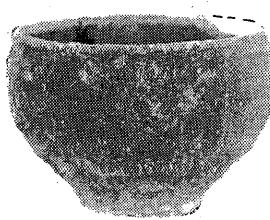
2104

高サ 7.5 瓢
口径 6.7 瓢



2117

高サ 7.0 瓢
口径 13.7 瓢
(ハアバアド大學へ寄贈ス)



2102

高サ 7.0 瓢
口径 10.2 瓢



2107

高サ 7.8 瓢
口径 11.9 瓢
(第十號堅穴出土)



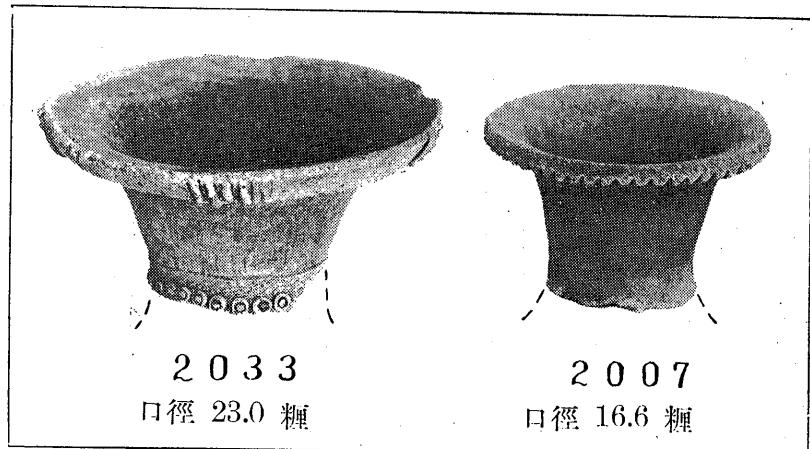
2105

高サ 6.8 瓢
口径 8.1 瓢
(第三號堅穴出土)

2115

高サ 11.0 瓢
口径 13.6 瓢
(第三號堅穴出土)
(ハアバアド大學へ寄贈ス)

寫眞第四 日吉臺出土彌生式B類土器



2033

口径 23.0 瓢

2007

口径 16.6 瓢



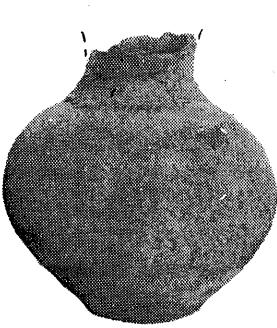
2003

高サ 22.0 瓢
口径 14.4 瓢



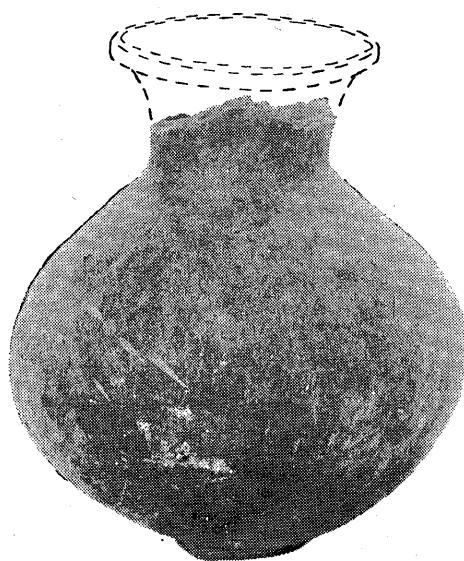
2005

胴徑 13.2 瓢



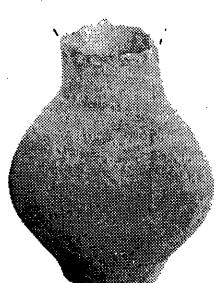
2002

胴徑 15.6 瓢



2001

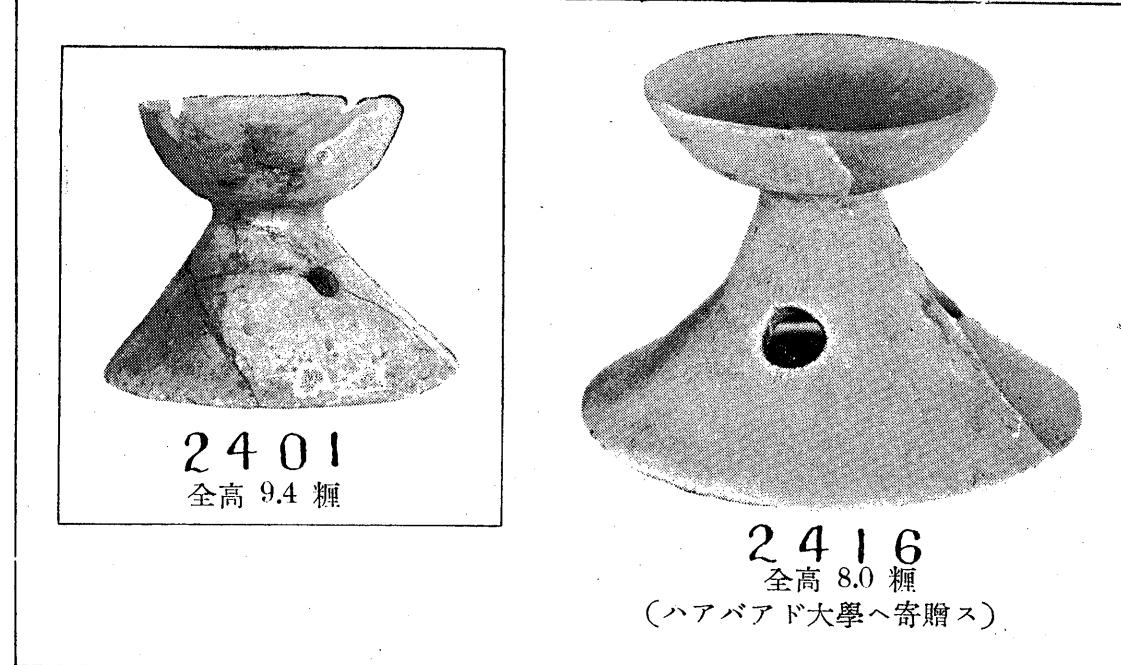
胴徑 24.8 瓢



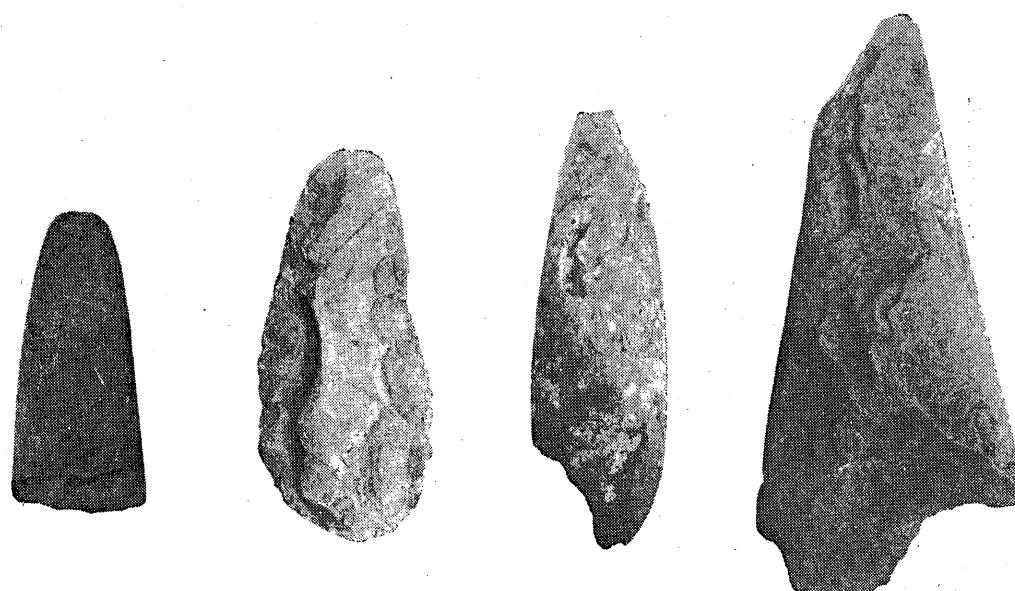
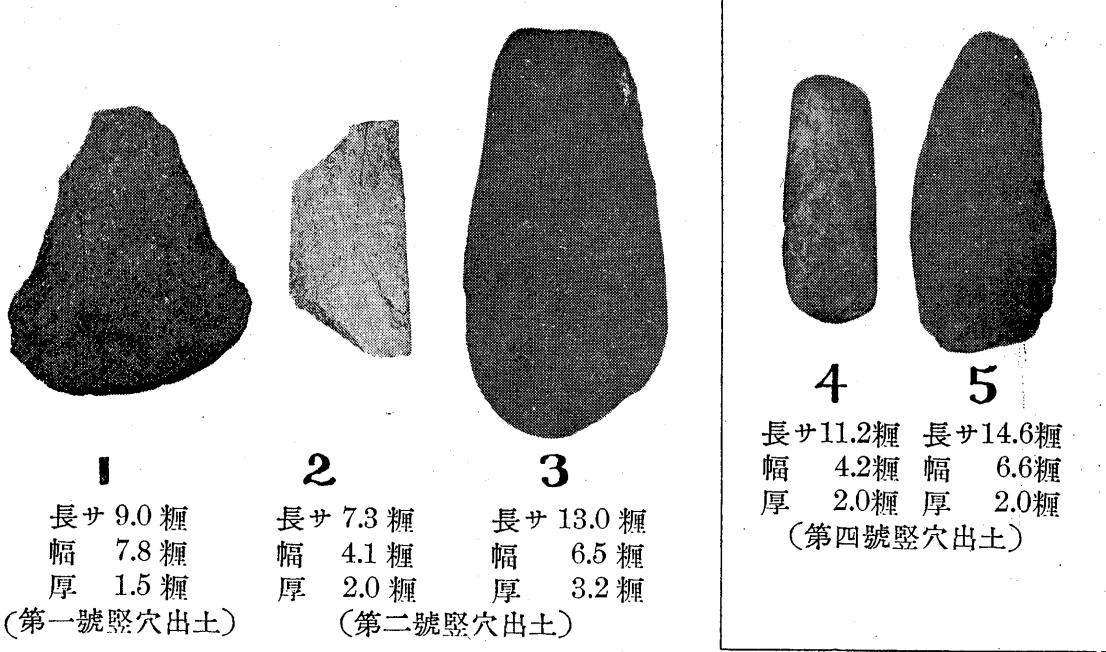
2004

胴徑 11.0 瓢

寫眞第六 日吉臺出土彌生式T類土器



寫眞第七 日吉臺出土石斧



石斧番号	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)
8	9.4	4.4	2.5
10	12.0	5.4	1.6
11	13.0	4.3	2.4
12	17.4	7.5	2.6

(第一一一號竪穴柱穴内出土)